

Discussion Materials for “International Politics” and/or “Area Studies-Japan”

『大学ガバナンスと国際化の研究』

—大学マネジメント国際比較からの考察—

はじめに——本プロジェクト・ペーパーの狙い

プロジェクト『大学ガバナンスと国際化の研究』は2016年4月から開始され2019年3月末で終了した。プロジェクトについては、メンバーである榎本がもっぱら初年度においてガバナンス問題の資料収集を行い、石積（以下筆者）がプロジェクト発足以来一貫して国内外においての問題提議、討論などに従事してきた。そうした活動については研究所が発刊する「国経研だより」や「国際経営フォーラム」への寄稿という形で随時報告を行ってきた。今後もプロジェクトの課題については継続的に研究を進める予定である。

国際経営研究所の各プロジェクトでは、その成果の一部として「プロジェクト・ペーパー」なるものを発刊することになっている。今回のプロジェクト・ペーパーは、当然ながらプロジェクト全体のテーマ〈大学ガバナンスの問題〉そして〈日本における高等教育の国際化の問題〉を背景にしているが、具体的、実践的な経験の中から生まれた一つの事例報告を行いたい。これは筆者が学部内における〈国際教育の実践〉に、学部の要請のもと従事してきたことを背景にしている。具体的には交換留学生に対する英語での講義提供という要請を受け、これを実践してきた。この英語での授業提供はこのプロジェクト期間と重なっているし、また現在も継続中である。端的にいえば経営学部国際経営学科、および同大学院修士課程の、主に交換留学生を念頭に置いたクラスにおける、筆者の側からクラス参加者に提供された、討論資料をここでまとめとして順序を再構成しながら提示したい。こうした講義は試行錯誤の連続であるが、いくつかの大前提のもとにすすめられている。以下簡単に列記しておく。

(1) 日本語がほぼ全くできない学生相手

交換留学生の日本語能力を全く問わないことを前提に、また日本についての知識のレベルを問わないことを前提にこの講義の運営が講師には要請されている。これが第一の前提条件である。この点に付随するが、少なくとも過去二年間については、日本についての知識の有無について、学部学生・大学院生問わず、個々の学生の抽象能力、表現能力においても相当な差があった。もちろん学部学生と大学院生では別々にクラス運営されているが、いずれにせよ様々なレベルの様々な国からの留学生、さらには多くの場合英語に困難を感じている参加日本人学生に、それぞれ対応するのはなかなか難しい。

(2) 出身大学に単位算入を前提とするプログラム

過去二年間に渡り提供してきたクラスは、欧州からの留学生にとっては欧州において近年大きく展開しているエラスムス・プログラム (Erasmus Program) に対応する位置づけになっている。彼らにはそのエラスムス・プログラムで各参加大学に要請されているスタンダードの要件、内容および形式両面からの制約がある。単位取得が大前提であり、それに見合った神奈川大学での講義提供が要請されている。

(3) 「日本」「日本体験」を最大公約数 (common interest area) に、英語を共通語として

学部でのこのクラスの参加者の所属大学 (Base / Mother Institution) はドイツ、リトアニア、フランス、ベルギー、メキシコ、スペイン、アメリカ、マレーシア、カナダ、神奈川大学 (経営学部・理学部) 等々と多岐にわたる。当然、英語の能力においても相当のばらつきがある。また、ほとんどの学生は一学期間の交換留学生であり、日本スペシャリストを目指しているわけではない。だが同時に、何らかの理由で日本には強い興味を持っている。そうした学生グループを相手に共通項を見つけ出すのはじつに難しいが、逆に参加学生のバック・グラウンドの多様性の中から、お互い驚くべき発見に出くわすことも多々あり、その意味ではなかなかスリリングな空間である。短期間とはいえ日本で生活しているのだから、やはり「日本」を最大公約数としてクラスを進めていくことが最も意味あることであると考え、筆者は学部講義の「国際政治学」では日本の部分を大きく取り上げ、大学院講義「日本研究」

ではできる限り経営に関連する項目を議論することに努めてきた。大学院留学生の多くが所属大学で経営学専攻の学生であったためでもある。

さて上記 (1) (2) (3) を前提としたクラス運営であったが、過去2年間で取り上げた項目について、いわば毎回の講義資料の紹介という形でこのプロジェクト・ペーパーの本体として提示したい。今回このような形で纏めることにした理由は大きくいって二つある。

ひとつは、この「まとめ」を次回以降のクラス運営に役立てないかという思いである。毎回のクラスのレジュメとテキストの中間的な位置づけである。学部においても大学院においても留学生たちは押し並べて極めて積極的に自分の意見や日本での経験を語りたがるし、もちろんそれはじつに良いことなのだが、やはり講師の側からの、少しまとまった問題提起や問題の抽象化、普遍化が必要となる場合がある。本編におさめられたレジュメ、図表、パワーポイント資料などの多くは、過去のクラスの中でそれぞれ必要に応じて提示されてきたものもあるが、今回初めて提示されたものもある。次年度に使うことになるかもしれない考えたものもある。

二つ目の理由は、経営学部の同僚の皆さんに筆者の講義ではどのようなことが扱われているのかを提示しておきたかったということである。じつはこのことは留学生対象の講義に限らず、様々な講義で本当は大切なことではないかと常々考えてきた。わが経営学部は国際経営一学科制をとっており、設立当初から経営+国際+教養ということで出発している。狭い意味での経営学というよりはいわゆる Liberal Arts をもともと指向していたのである。こうした前広な教育プログラムが成功するか否かはそれぞれの科目間の連携・統合にかかっている。短期間の滞在を前提にしている留学生はもちろん、一般日本人学生についても講義間の連携が決定的に重要なのではないかと、そしてそのためには講義各々の情報提供が極めて重要だというのが筆者の強い思いだ。

以上二つの理由での講義レジュメ、講義資料の本プロジェクト・ペーパー

という形を借りての提示であるが、上記2点に加えて、さらにより重要な点がある。それはこのクラスに臨む筆者の姿勢ともいべき点についてである。

レジュメ等を一瞥していただければすばすばすぐにわかることだが、筆者の日本理解、国際政治理解のためのレジュメ、資料は、スタンダードなものもあるが、かなり特殊なものもある。伝統的な意味での「教科書」という点では、問題が多いかもしれない。しかし、筆者は資料提示でも、また実際のクラス運営でも、できる限り私感、私見を生のまま学生にぶつけることが良いのではないと思っている。もちろん筆者の私見を押し付けない、少なくともそのことに対する反論を真に歓迎するという姿勢を自分自身で堅持し、また同時に参加者に対してははっきりと約束することは最重要である。つまり異論の表明が決して学生の評価にマイナスに働かないということを明確にすべきだと思っている。このクラスでも同様に、少なくとも参加学生は、特に留学生はこのことを歓迎するというのが筆者の過去二年間の確信である。かなり極端な私見に基づいた日本観なり国際観なりの提示についてそれを歓迎していると感じている。筆者自身は適切に論争的な（polemic polemicな）視点をクラスの中でも率先して示すべきではないかと考えている。筆者自身もクリティカルcriticalな視点を大胆に示し、それに対するクリティカルな意見表明を歓迎する。そうした弁証法的姿勢 dialectic approach が以前にもまして大切であり、大学の場でも市民権 recognition を得てきているのではないかと考えている。それは日本人学生あるいはすべて日本語で行われているクラスの場以上に留学生がその中心にいるクラスでははっきりしている。特に留学生相手には私見抜きの淡々とした blandly 説明としての講義は歓迎されないということである。

中立無臭 neutral odorless な典型的なテキストに類するものには、ネット検索その他で縦横無尽に情報アクセスできる時代にわれわれはいる。その点も踏まえ、レジュメも資料も権威的テキストではなく問題提起 posing questions でよいと考えている。そういう前提でテーマを選び、資料を提示している。もちろん実際のクラス運営においてはこうした教員側からのインプットが効

果抜群の場合も、また学生の興味関心にヒットしない場合もある。しかしそれも含めての試行錯誤、クラス内での軌道修正、要するに総合的な対応能力と熱意が教員には問われているのではないかと日々感じるのである。この点では経営学部開設時（つまり30年前に）に書いた筆者のエッセイ「大学の劇場化は可能か」また自分自身が登場する『日本にもあった白熱教室』の趣旨はますます有効なのではないかと感じているのである。これらの資料は参考資料として日本人学生、あるいは日本語を十分理解する留学生には別途配布する予定だ。

いずれにせよ、この「まえがき」で説明したような基本的な考え方のもとに、今回提示する Discussion Material は作られている。この Discussion Material はレジュメとテキストの中間的な位置づけになっていることは前述した。つまりこのレジュメを読めば100%教員の考え方、見方が解かるというものではない。多分に問題提起である。また、この冊子全体のコメントや説明は日本語がとりあえず中心になっている。クラスの中で筆者自身が英語で必要に応じて取捨選択しながら、あるいはその場の雰囲気の中で表現を変えながら、臨機応変に、できるだけ対話調で話をするのが予定されているので、すべてを英訳しているわけでもない。同時に、日本人参加学生には日本語での筆者の説明・コメントを事前に読み、それを参考に自分で英語で留学生に説明したり意見表明したりしてほしいという思いも込められている。

DISCUSSION MATERIAL は大きくは四つのパートに分かれている。

第一のパートは導入 INTRODUCTION である。このパートでは留学生もさることながら、日本人学生にも是非考えてほしい。大学でなにをやるとうしているのか、学問とはどういうものかなど、じつは多くの日本人学生が暗中模索のなかで大学生活を始め、自分の学んでいることの位置づけがはっきりせず何かくモヤモヤしたままで過ごしているのではないか。それを少しでも解決したい。このパートは二つのチャプターで構成されている。

第二のパートでは世界の流れを扱う。大きな世界史の流れについてのかな

り独特な見方をふたつ取り上げ、また近代化にまつわる問題をいろんな角度から考える。現在の私たちの社会の仕組みが基本的に成立したこの時期に、何が起こったのか、その後の世界の流れも含め、ここでは特に筆者の歴史の見方をもとに「国際政治学」に対応するテーマが扱われる。

第三のパートでは日本について考える。日本の現在を大きくとらえることがここでの中心になる。もっともここで取り上げる日本はもっぱら政治、あるいは政治文化からの日本論ということだ。

第四のパートで現在と未来を考えてみたい。とくにこれからの世界の中の日本の平和主義の積極的意味を考えたい。また新しい社会科学の可能性についても考えたい。このパートは筆者の独特な考え方、価値判断がストレートに示される。もちろん議論の材料提示だから、その考えに賛同する、あるいはまったく自由だ。

以上、第一から第四パートに大きく区分けされるが、それぞれのパートの中にチャプターが存在する。合計で13のチャプターが登場する。クラス運営という意味ではこの13チャプターを毎回1チャプターをめどに扱って進めることも可能かもしれない。いずれにせよ学生のバック・グラウンドと興味の示し方によって臨機応変に対応することが重要だろう。

Discussion Materials for the Class of “International Politics” and/or “Area Studies-Japan”

経営学部国際経営学科 提供科目

「国際政治学」(学部) 「地域研究—日本」(大学院)

討議資料

目次：TABLE OF CONTENTS

PART 1 導入 INTRODUCTION

Chapter 1 : WARM- UP

Chapter 2 : 学問の見取り図
BIRD'S- EYE VIEW ON DISCIPLINES

- 2-1 神奈川大学
KANAGAWA UNIV.について、その理念PRINCIPLE
- 2-2 学問の鳥瞰図
BIRD'S- EYE VIEW ON ACADEMIC DISCIPLINES
- 2-3 自分と社会
EXPERIMENTAL MODEL OF SOCIAL STUDIES

PART 2 世界の流れ WORLD HISTORY

Chapter 3 : ふたつの世界史の見方
TWO VIEWS OF WORLD HISTORY

- 3-1 21世紀の歴史 A HISTORY OF 21ST CENTURY
- 3-2 4大文明 FOUR MAJOR CIVILIZATIONS

Chapter 4 : 近代化のプロセスを考える
ON MODERNIZATION

- 4-1 近代化の社会変動PART I
SOCIAL CHANGE IN MODERNIZATION—PART I
- 4-2 近代化の社会変動PART II
SOCIAL CHANGE IN MODERNIZATION—PART II

Chapter 5 : 近代化の2側面
TWO ASPECTS OF MODERNIZATION

- 5-1 近代化と文明と文化の関係を考える
ON CIVILIZATION, CULTURE AND MODERNIZATION
- 5-2 近代化の3パターン
THREE PATTERNS OF MODERNIZATION

Chapter 6 : 近代化以降の世界
THE WORLD AFTER MODERNIZATION

6-1 90分の世界地図
A MAP OF THE WORLD IN ONE HOUR

PART 3 日本を考える ON JAPAN

Chapter 7 : 明治以降の日本
JAPAN AFTER MEIJI

7-1 JAPAN IN 90MINUTES

Chapter 8 : 日本の政治文化
ON JAPANESE POLITICAL CULTURE

8-1 TRIPLEX STRUCTURE OF JAPANESE POLITICAL
CULTURE

Chapter 9 : 誰が日本を動かす？
WHO GOVERNS JAPAN ?

9-1 鉄の三角形 IRON TRIANGLE

Chapter 10 : 日本の選択
JAPAN'S CHOICE

PART4 現在/未来 PRESENT AND THE FUTURE

Chapter 11 : 三つの戦争を再考する
RE-THINKING OF THREE WARS

Chapter 12 : 平和憲法
THE PEACE CONSTITUTION

Chapter 13 : 新しい道具
NEW GRAND THEORY

PART 1 導入
INTRODUCTION

Chapter 1 WARM- UP

まず参加者 (participants) の自己紹介 (self introduction)、問題意識 (awareness of issues, area of interest)、日本観 (view on Japan)、経験 (experience)、計画 (future plan)などを述べてもらうことから始まる。

このクラスではとにかく自由に自己紹介 (free self introduction) を行う。その中で自分の関心領域 (area of interest) について語ってもらうことが大切だ。今までにどのような日本関連の本、映画、音楽 (books, movies, music related to Japan) などと出会ったか。強い印象 (strong impression) に残っているものについて話してもらうことが重要だろう。留学生の場合は、これから半年間、かなり密度の濃い intensive 付き合いをすることになるが、過去の経験から言えば、平塚キャンパスのアット・ホームな環境もあるのだろう、放っておいても彼ら留学生同士はすぐに親しくなる。工夫が多少必要なのは留学生と日本人学生との間の橋渡し mediation・facilitation である。

日本人学生に関しては、このクラスでは英語が共通語 common language であること、英語でのコミュニケーション面で意識 consciousness しすぎないで、とにかく今ある自分の英語の力で積極的に交わること、その一点を強調すべきだ。

一方、特に留学生に対しては、日本人学生が英語を苦手としている理由や、そもそもコミュニケーションに対して受け身 passive な理由などについては、日本の歴史、特に鎖国の歴史 history of isolationism、非植民地化の歴史 history of lack of colonization や、現実としての単一民族性 largely monolithic nation、さらには内 inside と外 outside の構造など、とりあえずの説明はしておく必要があるかもしれない。ただしこれらの視点 perspective 背景理解 background understanding は、彼ら留学生が、これから日本に滞在しながら、また日本の様々なことをクラス内外で学び、考えながら、少しずつ積み上げ pile [heap] up していくことが大切であるし、それ自体が勉強であるから、短兵急 abrupt に答えを準備し、講義するという方法は避けるべきだろう。

いずれにしても、時には講義の効率 efficiency を犠牲にしてでも、この日本や日本人という未知な世界に先入観 preconception なく、そして好奇心

curiosityを失わずに、少しずつ、日本での体験を通して自分で日本を発見 discovery していくことの重要性を強調 emphasize すべきものと思われる。筆者は留学生にも、これから留学する日本人学生にも、常に < never assume anything > と呼びかける。

Chapter 2 学問の見取り図

BIRD'S- EYE VIEW ON DISCIPLINES

2-1 神奈川大学 Kanagawa Univ. について、その理念 (principle)

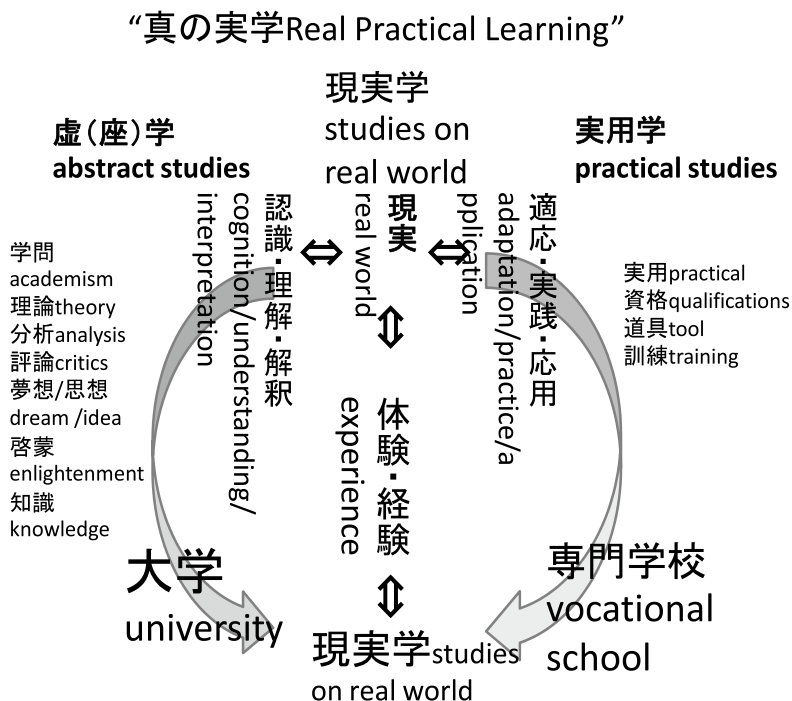
ここでは現在、大学 college or university と呼ばれている高等教育機関 higher educational institution が日本に 780 あることを紹介する。その中で神奈川大学は学生数、卒業生数 total number of ex-students, graduates において、それぞれ 20 位以内に位置する大規模大学である事を紹介することになる。入学の難易度 degree of difficulty についても紹介することが必要だろう。いわゆるアイビーリーグ the Ivy League. ナンバースクールではないが、有数の総合大学 all round university, comprehensive university である点は触れるべきだろう。ただ medical school はない。

高等教育機関の各国比較 comparison は留学生にとっても日本人学生にとっても極めて興味深いテーマであるので、この点はクラスの中で頻繁に frequently 話題になるはずだ。そのさいには主要国の大学進学率 the ratio of students who go on to the next stage of education 学生の各国間移動 a movement; a transfer、教育システムの特徴 distinctive feature などの資料が興味深いだろう。OECD がまとめた統計を出しているし日本の文科省ももちろん出す。英語での資料もあるので、これも参考資料として必要に応じてクラスで紹介する。

さて神奈川大学は他の私立大学同様、建学の精神 the school motto や、様々なスローガン・理念を掲げているが、そのひとつが「真の実学」 true practical learning である。この「真の実学」は、他のスローガン、例えば「世界へ未来へ」「教育は人をつくるにあり」質実剛健 simplicity and fortitude ・中性 neutral 堅実 steady ・積極進取 positive; active; aggressive; enterprising; progressive などと少し性格 nature を異にする。つまり教育の中身 content にある程度踏み込んだスローガンだ。この「真の実学」については筆者自身が副学長時代に父兄や・在学生に様々な機会と話をしなければならなかったという事情もあり、その当時ある程度考えを煮詰めた。筆者自身はより直線的な、学生や父兄にインパクトを与える、そして一方では私たち教職員自身をも拘

束bindingする、いわばマニフェストのようなものを掲げるべきだと個人的には思うが、いずれにせよ「真の実学」に関する筆者の考えを示しておく。もっとも「真の実学」というスローガンがどのような経緯や意図で採択されたか、もうひとつははっきりしない。「真の実学」解説のオフィシャルバージョンというのではないが、その時点で考えたことを示しておく。今でもある程度、有効なのではないかと思っているので以下のチャートで提示する。

Chart 1 Produced and modified by M.Ishizumi



このチャートで大切なポイントをいくつか列記しておく

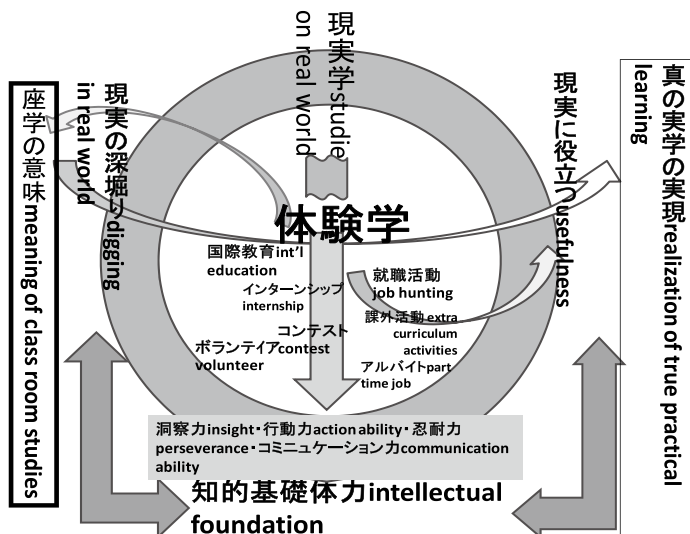
- ① 高等教育の社会的位置 social position づけの変遷 transition を考えなければならない。つまり elite ⇒ mass ⇒ universal という変化である。日本もユニバーサルな段階であることははっきり認識した方が良い。大学全入時代である。日本の大学はもともとヨーロッパをモデルにしてきたとよ

く言われるが、そのヨーロッパ自体もすでに universal の段階に突入している。それは統計的 statistically にも表れているが、過去何年間かの交換留学生との経験や、20年以上にわたる大学訪問で筆者ははっきりとした実感 a feeling of reality・認識 recognition をもっている。韓国は言うに及ばず、中国でもすでに universal の段階に突入していると言えよう。

- ② 高等教育=伝統的な大学というイメージからの脱却 slough off がどうしても必要である。高等教育進学率が圧倒的に高い北欧諸国 Scandinavian countries やオーストラリアなどは、いわゆる vocational school 的な教育を大学の中に取り入れることで進学率の驚異的な伸長を実現している。いわゆる生涯教育 remedial education は世界的に急速に進展することが予想される。明らかに日本ではこの点で遅れ (time) lag; delay が目立つ。
- ③ 上記 Chart 1 の左側はもっぱら伝統的な大学が担ってきた。右側は専門学校ということになる。大学の中に実学を大きく取り入れるのか、高等教育の役割分担 allot a portion of the work to each をはっきりさせるのかという選択肢がある。大学運営の中心にいる教授たちはどうしても研究者としての意識が強く、ここにギャップがある。つまり teacher なのか instructor なのか、professor なのかという選択を迫られている。
- ④ こうした状況の中で、神大はいわゆるエリート大学とは一線を画し、また職業訓練機関とも一線を画し、その中間的ポジションを表現する taking a middle position ために「真の実学」なる教育研究の理念を掲げたという経緯がある。その際、たんなる足して二で割るという発想でなく、本来もう少し前向きに、いわば止揚アウフヘーベン sublation; <ドイツ語> Aufheben するという発想で編み出された言葉であると理解したい。
- ⑤ 大学教員は意識として professor に多分に highly 傾くが。本当は teacher 意識こそが大衆化した大学の状況の中では求められているはずである。さらにいえば facilitator としての意識と能力が求められるが、これはもちろん簡単ではない。
- ⑥ いずれにせよ、「真の実学」の再定義 re-definition を筆者は現実学 studies on real world とした。ここでは学生の、また教員の現実社会、現場での体験・経験が大きく取り上げられることになるだろう。そうしたことを

少しでも可能にするために大学としても意図的intentionally; deliberately; by design. な仕掛けa device; a mechanism; works;が工夫されよう。その構想を示したものが下記のチャートということになる。

Chart 2 Produced and modified by M.Ishizumi



このチャートに関して2・3指摘する

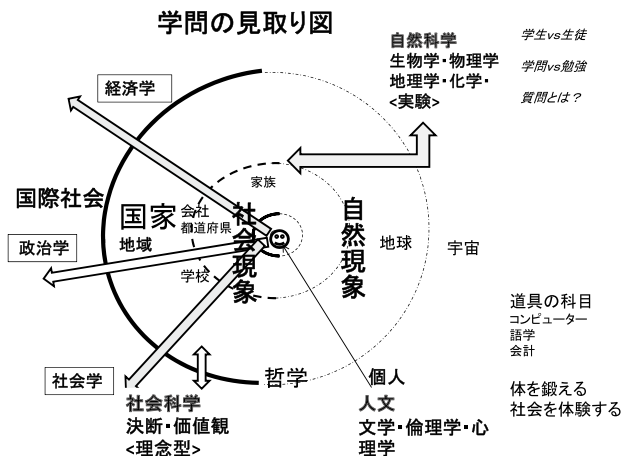
- ① 現実社会においては、たんなる知識でなく、これからますます洞察力、行動力、忍耐力、コミュニケーション力が問われることになると日本人学生たちも分かっている。2018年度筆者は病に倒れた同僚教授の代理でまったくの門外漢であるにもかかわらず、ゼミ「国際マーケティング」を担当したが、日本人学生たちの〈体験〉に対する意欲は極めて強く、〈体験〉と〈座学〉の組み合わせこそが、これからの大学教育のカギであると実感した。
- ② 欧米、特にヨーロッパの大学におけるインターンシップや海外留学の学部教育における組み込みは急ピッチで進んでおり、この点では日本の大学は2週回遅れ、3週回遅れである。10年ほど前からわかっていたが、実際に交換留学生を教え、その感を強くする。

2-2 学問の鳥瞰図 BIRD'S-EYE VIEW ON ACADEMIC DISCIPLINES

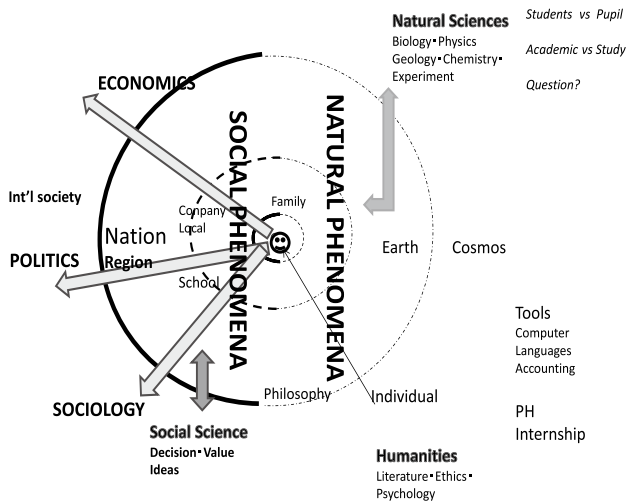
前記Chart 1, Chart 2は神奈川県が掲げる真の実学についての筆者なりの理解である。このチャートは10年近く前に作成したが、ますます重要だと考えている。2019年の現在、変化の兆しはある。高等教育に限らず日本の教育においてアクティブ・ラーニングの必要性や、体験型学習の重要性はここ数年特に強調されるようになった。もちろんこれは社会全体として「欧米に追いつけ」という発想でなく「主体的に自らの道を日本としてもいよいよ切り開かなければならなくなった」という背景がある。しかしそれにしても大学は結局のところ学問を通じて（その多くは座学にならざるを得ない）学生に対峙することが中心となるわけで、そうである以上、学生には少しでも学問とはどういうものなのかについて全体的な感覚は持ってもらいたいと思う。また学生もそれをじつは渴望していると思う。

そうした問題意識の中で、2-2として以下のChart 3は提示される。Chart 3は15年ほど前に作成されたものである。具体的には経営学部に入學してくる新一年生に対してクラスの出発にあたり解説を試みたものである。

Chart 3 Produced and modified by M.Ishizumi



Bird's-eye View on Academic Studies



このChart 3についていくつかポイントを記す。

- ① 学問は人間界・自然界の森羅万象 the whole of creation, all the phenomenaに関して扱うが、大きくいって三つに分類される。社会科学、自然科学、人文（科学）である。ただし大学で学ぶことは他にもあって、

科目としては道具の科目、体を鍛えること、社会を体験することなども大学が提供することに入る。

- ② この中で経営学部の学生は重点的には社会科学を学ぶ。理学部の学生は自然科学を学ぶ。人文はその多くの科目がいわゆる教養科目に入るが、これはもっぱら狭い意味での科学を越えて、もう少し幅広く、特に人間（個人）そのものについて考えるということになる。Individual とは not-dividable という意味だ。社会現象の最小単位だ。
- ③ 社会科学と自然科学の大きな違いはなんだろう？社会科学は社会現象について、自然科学は自然現象について学ぶ。この両方にかかっているものに哲学があるかもしれない。
- ④ 社会現象と自然現象の大きな違いはなんだろう？大きくいって社会現象は具体的に手で触ったりできず、目に見えなかったりする場合が多いが、自然現象は多くの場合、目に見えるし具体的に扱うことができる。tangible と intangible という言い方をする。
- ⑤ ④の事と関連するが、自然科学では＜実験＞が多くの場合可能だし、重要だ。理学部の学生が＜実験＞で忙しいのに対して、経営学部の学生はあまりそうでないのは、それぞれが対象とする分野が違うからだ。理学部の＜実験＞に対応するものとしては社会科学の＜理念＞・＜コンセプト＞・＜理念型＞などがあるだろう。そうしたものを打ち建てたり、それが現実の社会現象に照らして説得力を持つかどうかを検討したりするのが社会科学だ。
- ⑥ さて社会科学が扱う社会は人間が作るものだ。複数の人間が作るものだ。それは大小さまざまある。共同体とってよいだろう。小は家族から始まり、大は国際社会まで様々ある。これを分析し、より深く理解しようというのが社会科学だ。
- ⑦ 社会科学には大きくは三つの基本的なアプローチがあるとされてきた。経済学からのアプローチ、政治学からのアプローチ、政治学や経済学でカバーできない分野をカバーしようとする社会学からのアプローチだ。
- ⑧ 経済学は家庭の経済を扱う家政学 home economics から始まって、大小それぞれの共同体の経済問題に光を当てようとする。この中で大きくはミ

クロ micro 経済学とマクロ macro 経済学がある。国や国家間の経済運営はもっぱらマクロ経済学ということになる。会社という共同体の場合は、マクロ経済学もミクロ経済学も重要だ。例えば国や国際社会の景気や成長はマクロだが需要と供給 (demand and supply) の問題などはミクロ経済学の分野だからだ。ところで経済学の定義は色々あるが筆者が学生時代にであったひとは studies on the maximum utilization of scarce resources (希少資源の最大有効活用) というものだった。

- ⑨ 政治は小さな共同体 (例えば家庭) にも、町や、村、大都市にもそして国家にもある。もちろん国際的な政治がある。こちらの方は経済学のようなミクロとマクロの政治学という言い方はあまりせずに政治現象全般に当てはまる様々な理論 theory、理念 ideas、コンセプト concept が中心になるだろう。何々主義ism というのもこれに近い。筆者の学生時代から覚えている政治の定義のひとつは the authoritative allocation of power (権力の権威的配分) だ。
- ⑩ さて経営学 business management /administration だが、筆者の考えでは経営学は経済学と政治学とそれから社会学あるいは心理学などの応用分野 applied area、実践分野 practice だと思う。だから欧米の多くの伝統ある大学では、経営学は大学院 graduate school で学ぶという考えがよい。international business management/administration を学部で学ぶというのはかなり欲張っている challenging が、幅がすごく広いだけに、自分自身でうまくそれぞれの科目を連関つけることができればかなり面白いものになるはずだ。

2-3 自分と社会 EXPERIMENTAL MODEL OF SOCIAL STUDIES

上記2-1では「真の実学」とは何かについて考えた。上記2-2ではより基本的な「学問の見取り図」をチャートにしてみた。その延長線上 as an extension で具体的にはどのようなクラス運営と履修科目配置などを発想できるかを 学部の将来構想とは直接関係なく、日本の大学教育プログラム一般を念頭において考えた。あくまでも実験的なものだが、現代の日本の学生たちの現状を踏まえたものだ。それを「実験的モジュール科目」と呼ぼう。

- ① ここで提示した「実験的モジュール科目」は社会科学系の学生全般を一応念頭に置いている。筆者が属する経営学部国際経営学科を特に意識しているものではない。むしろ最近強調されているリベラル・アーツ教育のひとつの可能性として提示されている。
- ② ただし、じつは経営学部設立の際の考え方と通低している。今、時代はこのような考え方に向かいつつある。30数年前、設立認可の自由度がもう少しあれば、まさしくこうした教育システムこそが経営学部設立の思想の具体化embodiment/realization/concreteとして実現していたに違いないとさえいえる。30数年前、経営学部設立のリーダー箕輪茂男氏（元東大出版会理事長）は衣笠洋二氏（元神大理事長）とともにリベラル・アーツ系の学部を構想していた。当時においてはそうした学部はICU・東大の教養学部以外にはほとんどなかった。設立認可のプロセスで経営学部という名称になり、伝統的な経営学部、商学部の科目配置curriculumに傾かざるを得なかったが、じつはこの経営学部は教養・国際・経営という3系統を包摂integrate/include, combine するという点で出発した。このあたりの経緯は学部の多数の教員がかかわった著書『国際教育の実践』（白桃書房1999）に詳しく書かれている。
- ③ 教育方法については、ここで提示するようなモジュール型教育方法を、はじめから構想していたというのが、少なくとも学部創設の旗振りleaderであった箕輪氏のスタンスであった。今でいう双方向both direction授業、体験型教育、クリティカル/シンキング教育などが基本方針であった。今回提示するような具体的な「大テーマ設定」、それに連動する科目配置、さらには具体的なヒアリング・ディスカッション、プレゼンテーション配置までにはもちろん踏み込んでいなかったが、この流れはまさしく経営学部設立の考え方のひとつの表現でもあるだろう。
- ④ 上記②③のように、以下に提示する実験的モデルは、実際にはもちろん試みられることはなかったが、時代の流れは明らかにアクティブ・ラーニングであり、双方向授業であり、PBL（project based learning）である。この点については今回のプロジェクト「大学ガバナンスと国際化の研究」の中で文献を読み、様々な会議に出席し、プロジェクトメンバー榎本教

授との様々な議論や現地視察を行う中で確信を得た。この流れは今後も加速するだろう。願わくば経営学部のカリキュラム改革のなかでもその点を意識してほしいものだ。それが本学部の競争力強化につながると確信している。

さて、それでは「大テーマ」設定を出発点にするモジュール型科目設定、クラス運営の構想例をいくつか示してみよう。設定した例としての「大テーマ」は「教育と大学と自分」「グローバル社会とはなんだ?」「社会を動かす力としての思想について考えよう」「政治と政治参加」「経済の仕組みと現実を把握する」の5つのテーマを例示する。いずれの場合もまず自分自身の問題から出発して徐々に座学、つまり確立されている<学>を学ぶこと、つまり自分の問題の一般化、普遍化に結び付けての学習が意図されている。

このアプローチはじつは歴史の勉強における<倒叙法>inverted methodと呼ばれるものとよく似ている。つまりただいま現在の社会問題（例えば朝鮮半島はなぜ北と南に分かれているのか、なぜ9.11が起こったのかなど）から出発して少しづつ歴史を遡って学んでいくという方法だ。古代から始まる日本史、世界史の歴史の学び方と正反対の順番での歴史の学び方だ。受験科目としての世界史や日本史ではない自分の?を解くための学びとしての日本史、世界史の学び方のことだ。それを上記のような大テーマに当てはめたいと思う。もちろん大テーマはまだまだ設定できる。それを『モジュール型科目設定』と呼ぼう。

そのモジュール型科目設定の中の「大テーマ」で学生にとって最も入りやすいのは、自分の今いる場所、つまり大学について考えることだろう。その意味でこのテーマ「教育と大学と自分」を最初に扱いたい。それに続けて現在のネーミングである経営学部国際経営学科、予定される新学部名としての国際経営学部になんで「グローバル社会とはなんだ?」を例示し、いわゆる一般教養教育の中核ともいうべき大テーマとしての「社会を動かす力としての思想について考えよう」が登場し、やはり社会科学系学部ということで「政治と政治参加」「経済の仕組みと現実を把握する」が登場する。最初のテーマ「教育と大学と自分」については日本語と英語両方がひとつのチャートで

表される。それに続く大テーマについてはすべて最初に日本語で、続けて英語でそれぞれチャートの作成がなされている。これはたんにスペースの問題である。つまり日英両語を同時に表記すると字数が多くなりすぎてチャート自体が判別不能になる。他意はない。これらの大テーマに関する表記では左側ページに日本語が、右側ページに英語表記が現れるようになっているはずだ。それではまず大テーマ「教育と大学と自分」からだ。

Chart 4

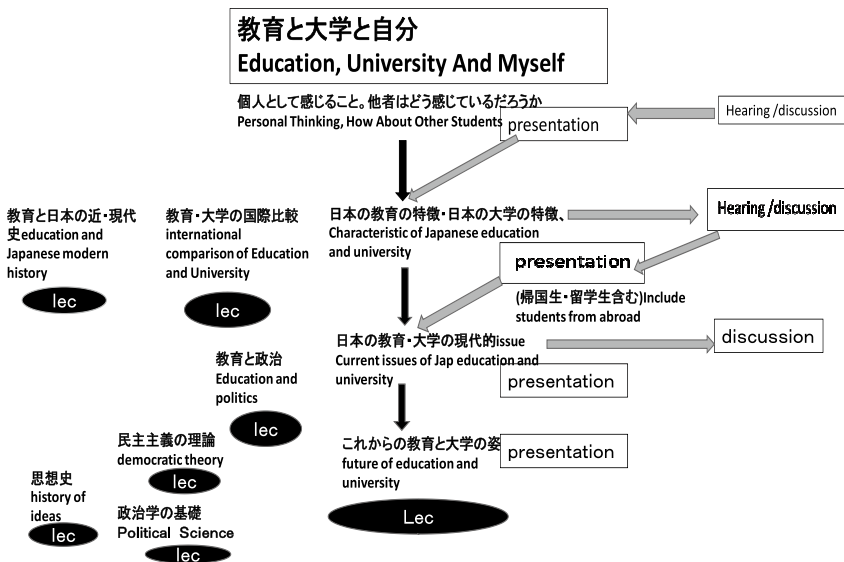


Chart 4について

- ① 教育は最も身近な問題だ。そのことを考えることから出発する。このテーマであれば日本人学生も語るべき材料は沢山ある。外国人学生にとっても日本の大学や教育は最も興味あるテーマのひとつだ。日本人しかいないクラスの場合は、同じクラスにいる日本人学生がどの様に教育や大学について考えているか、本音でどう感じているか、それをヒアリングすることから始めたらいい。
- ② 外国人から見た日本の教育の特徴、良い点と悪い点に関しての話し合いは、

ほぼ確実に盛り上がるというのが筆者の経験だ。欧米系とアジア系で、学生の感じ方の違いもすごく面白い議論を導き出す。

- ③ 日本語で言う「教育」と英語でのeducationの根本的な意味の違いについて、議論できれば非常に有効だ。ここで福沢諭吉Fukuzawa, Yukichiの文章を紹介することも可能だ。また特に日本人学生には戦後すぐに文部省が作った『民主主義』という教科書を見てもらうことも意義あることだろう。
- ④ 教育の仕組みや教育の精神はその社会の歴史と密接に関係していると参加者は気づくだろう。その時学生は歴史的背景を学ぶことの必然性inevitabilityに気がつく。また教育は特に政治と密接に関係していることにすぐ気がつくことになり、そこで日本史の講義や政治学の勉強の必然性が出てくる。
- ⑤ 教育の問題は政治学の中でも、特に民主主義の歴史や理論と密接に関係していることに気がつくだろう。その時そういう科目を勉強してみることだ。そのことにより今までとは数段違う深い見かたで自分が多大な時間とエネルギーをかけている教育について考えることになる。

ここから先の(次ページからの)モジュール科目例は左ページに日本語、右ページに英語となる。前述のように、これは単純にスペースの問題だ。英語と日本語を同じページに入れるとあまりに文字が小さくなるので日本語版と英語版をそれぞれ分けている。チャートの見方は以下になる。

- ① 上段から下段に向かい、身近な問題意識から出発し、だんだん本質的essential・普遍的universal/transcendentalな理解と考察に進む。
- ② 重要なのは、あくまでも真ん中↓に帰ってくることだ。↓は、常に自分の問題意識に帰ろうという誘いだ。
- ③ 右側にはヒアリング、あるいはディスカッションという、アクションによる(座学ではなく)学習がある。それをもとにプレゼンテーションという形での発信の行動がある。
- ④ 左側には座学が位置づけられる。ここでオーソドックスorthodoxな講義の意味、必然性が生まれる。

Chart 5

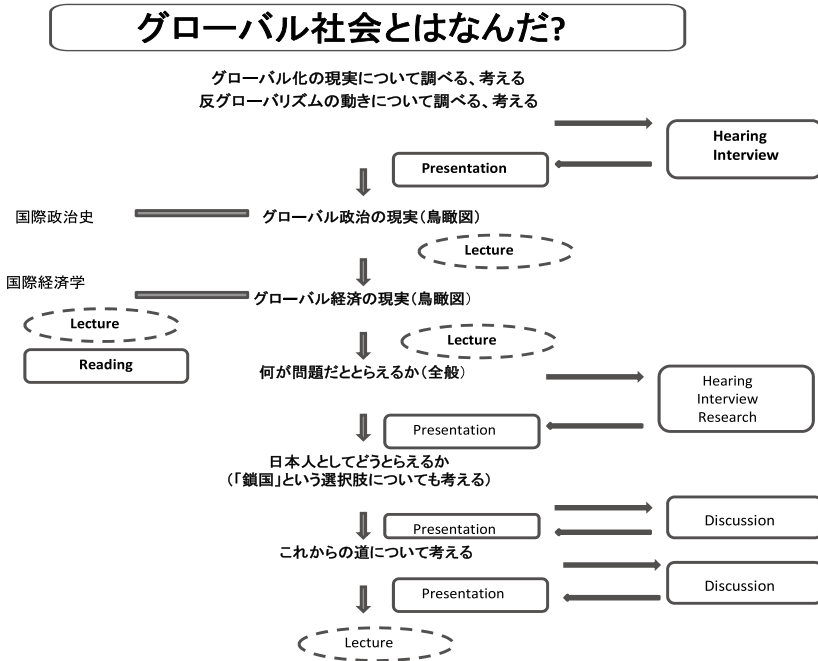


Chart 5について

- ① まずはグローバル化とは何かという漠然 vagueとした問題から出発してよいと思う。それぞれが違ったイメージを持っていることを確認することだ。はじめから定義付けする必要はない。
- ② 日本人としてどうこの問題をとらえるかは本当に大きな問題だ。ヨーロッパの現実なども調べることだ。クラスにいる欧州からの留学生には是非この問題について時間をとって話をしてもらいたい。議論は盛り上がるだろう。2019年は日本における移民政策開始元年になる可能性がある。

(What is the global society?)

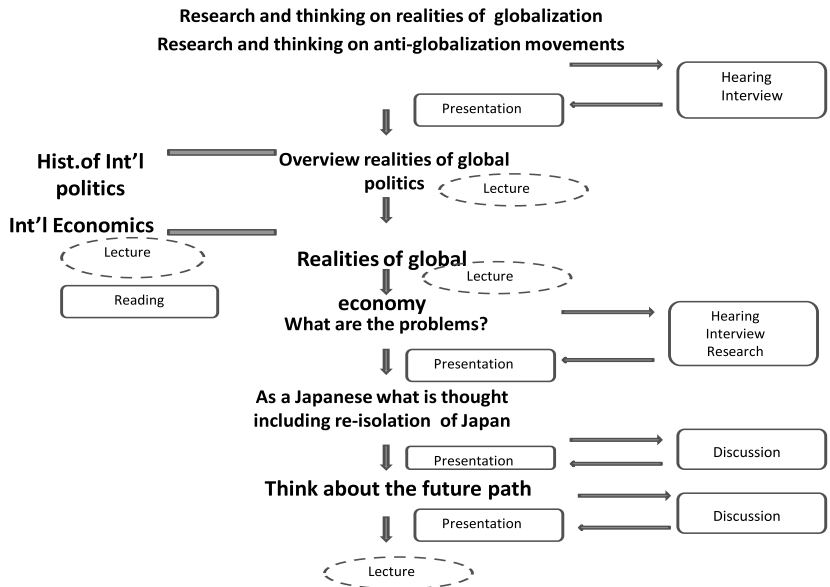


Chart 6

社会を動かす力としての思想について考えよう

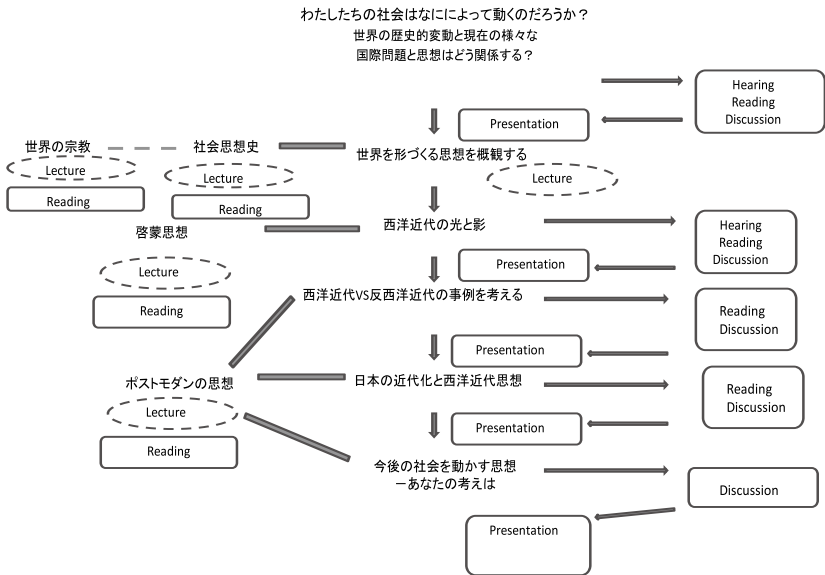


Chart 6について

- ① 日本語で「思想」というと、とてつもなく難しい響きがある。英語では単にideaだ。「思想史」はhistory of ideas だ。啓蒙も難しい言葉だが、じつはすごく大事な言葉だ。これは enlightenment となる。「光を入れる」だ。
- ② ここで扱う大テーマは超・超大テーマだから、とてつもなく深い広い。大事なことは人々の考え方や、アイデアや、宗教や、価値観といった、モノやお金や技術といった具体的でないことがじつはすごく大事だということだ。もちろんここで扱えることはほんのさわりだけれど、いろんなこと考えるきっかけになる。

Think about the ideas/thoughts that move the world

What moves our societies?

Ideas are related to social changes and international relations ?

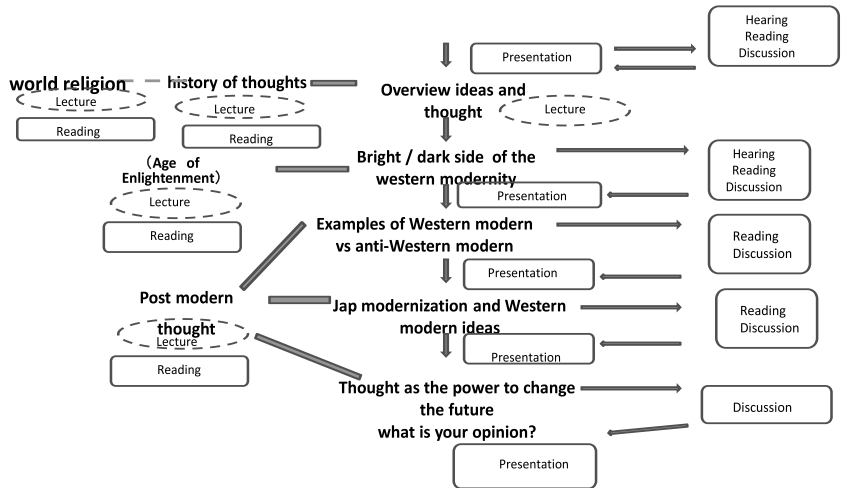


Chart 7

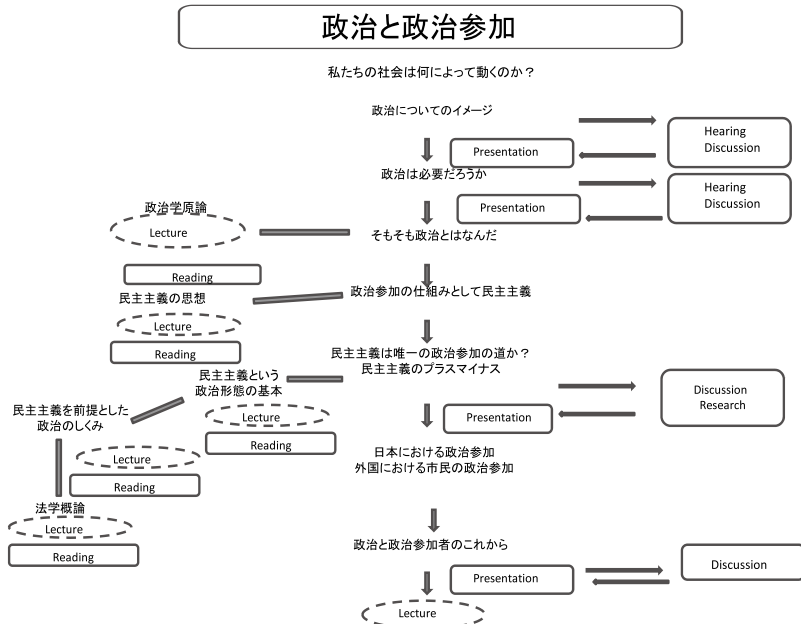


Chart 7について

- ① 欧米の学生と日本人学生との最大の違いは政治に対する姿勢だろう。欧米の学生の政治的関心の強さに日本人学生はびっくりする。日本人学生にはそういう体験をしてほしい。
- ② 政治を語らないこと、宗教や倫理を語らないことは、社会を語らないことだとさえ言えるが、筆者は考えるが、日本の教育では政治も宗教もタブーに近い。世界のニュースの大半は政治であり、宗教なのだから、これに無関心indifferenceということは、要するに日本の教育は、国際社会に無関心な若者を日々再生産reproductionしているということだろうか？

Politics and political participation

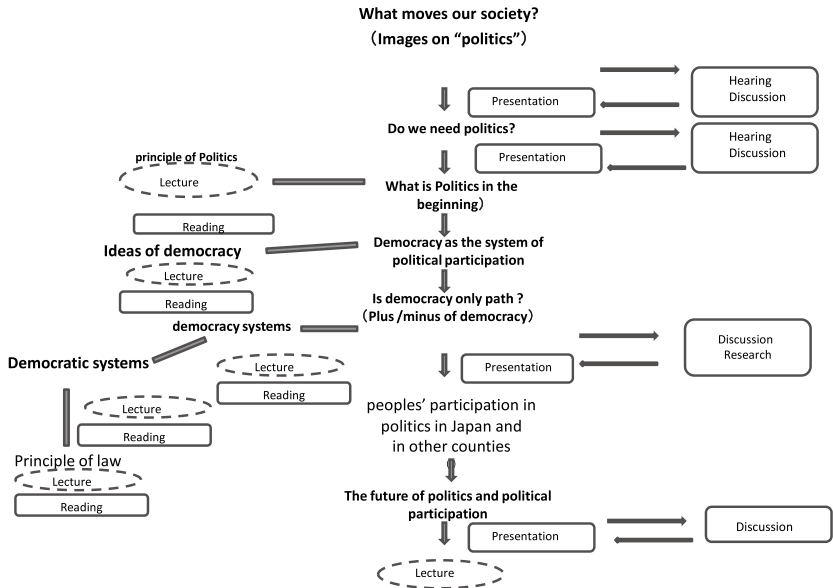
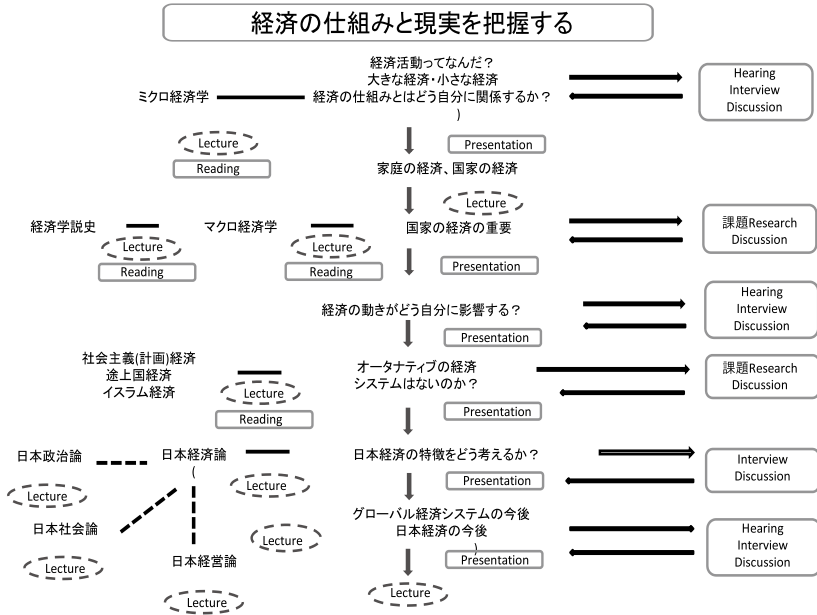
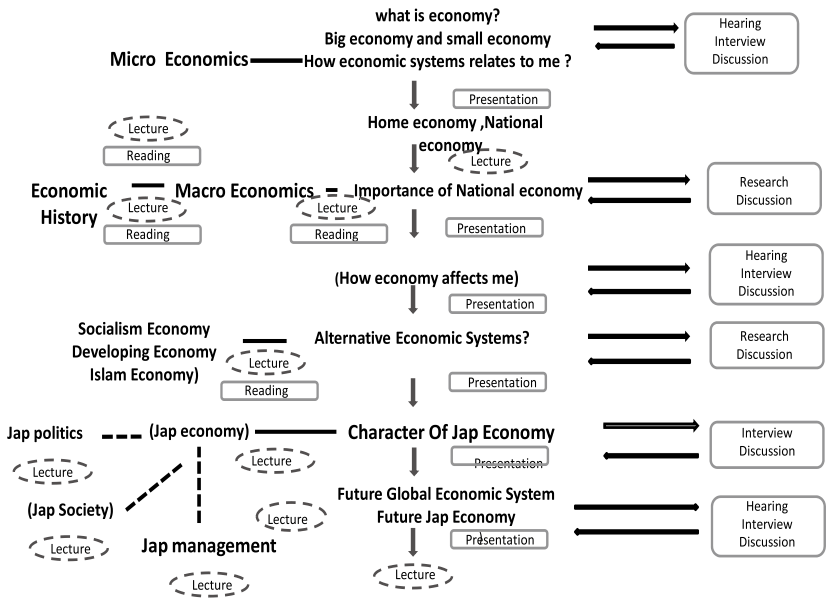


Chart 8



Grasping economic systems and realities



PART 2 世界の流れ

WORLD HISTORY

このPART 2 世界の流れ には特に「国際政治学」という科目に直接関係するテーマについてのレジュメ、チャートが収められている。Chapter 3・4・5・6のうちChapter 3は超・長スパンをとった世界のこれまでと、これからについての話だ。二人の面白い著者の本が紹介される。独特の世界通史だ。いろいろ議論がある本だと思うが、だからこそ面白いと考えた。Chapter 4・5については「近代化」と呼ばれる時代のことについての話だ。なぜ「近代」か？良くも悪くも、やはりこれが今現在のわれわれの社会の基盤になっているからだ。Chapter 6では近代以降の世界、だいたい20世紀終盤までの世界の見取り図の提示だ。60分で説明しようという筆者の大胆な試みだ。

Chapter 3 ふたつの世界史の見方

TWO VIEWS OF WORLD HISTORY

Chapter 3は超・長スパンをとった世界のこれまでと、これからについての話だ。二人の面白い著者の本が紹介される。独特の世界通史だ。いろいろ議論がある本だと思うが、だからこそ面白いと考えた。ひとつはジャック・アタリという人の書いた『21世紀の歴史』（作品社）の紹介である。もうひとつは橋爪大三郎の『世界は四大文明でできている』（NHK出版）の紹介だ。どちらも世界史の典型的な教科書というものではない。それぞれかなりユニークな世界のこれまでの流れの見方の提示だ。もちろん興味をもった学生には直接それぞれの本を手にとってほしいが（橋爪氏の本は英訳はないと思う）あくまでも、このクラスの中でのディスカッションのための問題提起という意味で紹介したい。日本語についても英語についても筆者の大胆な要約と英語版だから「正訳」というものではない。

3-1 21世紀の歴史 A HISTORY OF WORLD HISTORY.

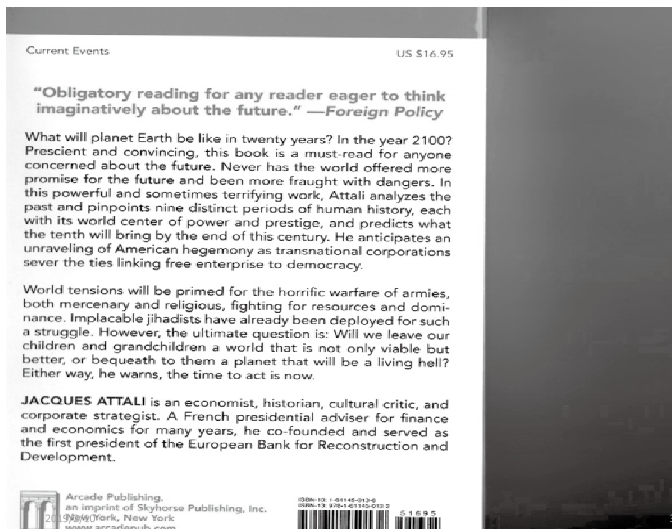
“A Brief History Of The Future” by Jacques Attali

Chart 9

『21世紀の歴史』ジャック・アタリ



Chart 10



ここからが本の要約。アタリは人類が第3の波に向かうと予言prophesyする。

Chart 11

三つの波が21世紀を決定する Three Waves Determines The 21st Century

“From century to century, humankind has asserted the primacy of individual freedom over all other values”

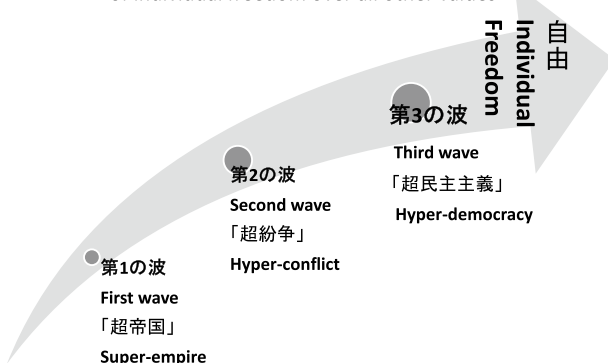
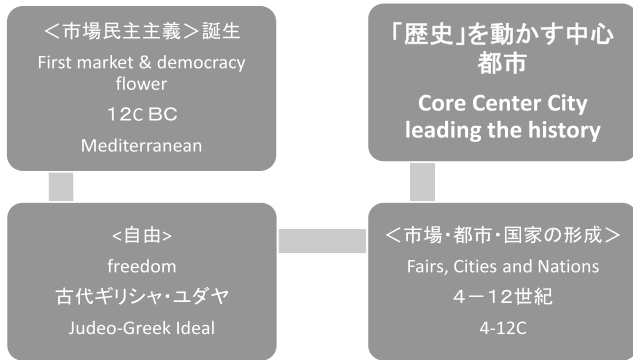


Chart 12

第1の波以前: BEFORE THE FIRST WAVE
資本主義の歴史: A Brief History Of Capitalism



アタリは歴史を動かす中心都市が常にあったと論じる。世界の歴史は資本主義の歴史だったともいう。以下①のブルージュからその歴史を辿る。

- ①<資本主義のうぶ声> The Beginning of the Mercantile order
Bruges 1200 – 1350
- ②<アジアの征服> The Conquest of the East
Venice 1350 – 1500
- ③<印刷術> The Triumph of The Printing Papers
Antwerp 1500 – 1560
- ④<投機という芸術> The Art of Speculation
Genoa 1560 – 1620
- ⑤<船> The Knack of Flyboat
Amsterdam 1620 – 1788
- ⑥<蒸気機関> The Power of Steam
London 1788 – 1890
- ⑦<内燃機関> The Hyday of the Machine (Internal -combustion engine)
Boston 1890 – 1929
- ⑧<電気の勝利> The Triumph of Electricity
New York 1929 – 1980

⑨<ノマド> California Nomadism

Los Angeles 1980 --

そしてアタリは⑩としてアメリカ終焉の始まり The beginning of the end が現在だと論じる。

次の展開として可能性を持つかも知れない、アメリカ以外の中心都市候補について広く検討する。ただし、アタリは今までの様な中心都市の重要性については否定的である。このことは彼の第1の波の性格ではっきりしてくるというアタリの見方である。

Chart 13

アメリカ以外のセンター都市 Center cities other than the U.S.

- ・ ロンドン・中心都市の特徴を増大する=多様な人種・港・空港・独創性あるが産業後背地、インフラが不足
 - ・ ロンドン/フランクフルト/ブリュッセル/リール/パリ の連合都市の可能性
 - ・ スtockホルム/ヘルシンキ/オスローの可能性
 - ・ 東京: 80年代にチャンスをつかみ損ねた。「2030年でも「普遍的な価値を創造する能力」に欠如。個人の自由は東京の哲学的理想ではなく、東京は外国から才能豊かな人々を集められない。
 - ・ London: enhance the character as the center city. Strength=multi-racial society, seaport, airport, creativity. Weakness=infrastructure, lack of industrial hinterland.
 - ・ Possibility of LONDON-FRANKFRUT-BURUSSEL-LILL-PARIS alliance center cities
 - ・ Possibility of STOCKHOLM-HELSINKI-OSLO
 - ・ Tokyo: Lost the chance in the 80'. Even in the year of 2030, lacks the ability " to create the transcendental values". Tokyo will not be able to gather together the most talented individuals.
- ・ ここまでがアタリ流の世界史の流れだ。そして彼は今、われわれは未来の流れの第1段階に突入しようとしているという。未来の第1の波が訪れようとしているという。未来の第1の波 First wave は超帝国 Super-empire の波だという。
- ・ ただその前に地球全体を見渡して、この超帝国の波が訪れる直前の状況をもう少し見ておこうという。台頭する国、地域の現状を見ておこうという。JUST BEFORE THE 1ST WAVE、Positions of emerging nations and areas.

以下がアタリの各国に関する現状認識とここ数年の未来の予測だ。この本

の日本語訳が出たのは2008年だが、それから10年、かなりの確度で彼の予言は当たってきた。

Chart 14

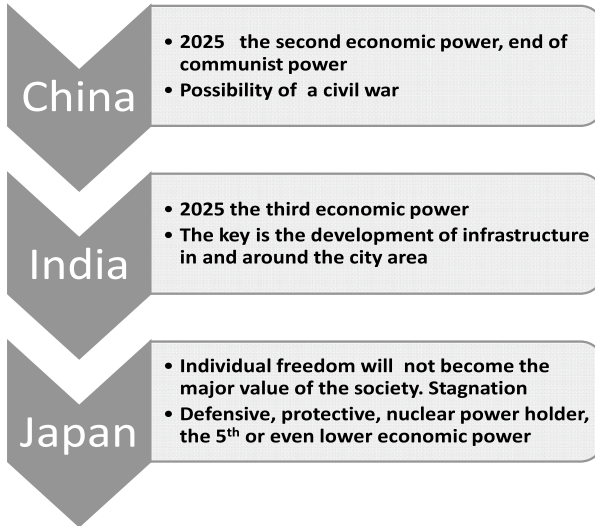


Chart 15

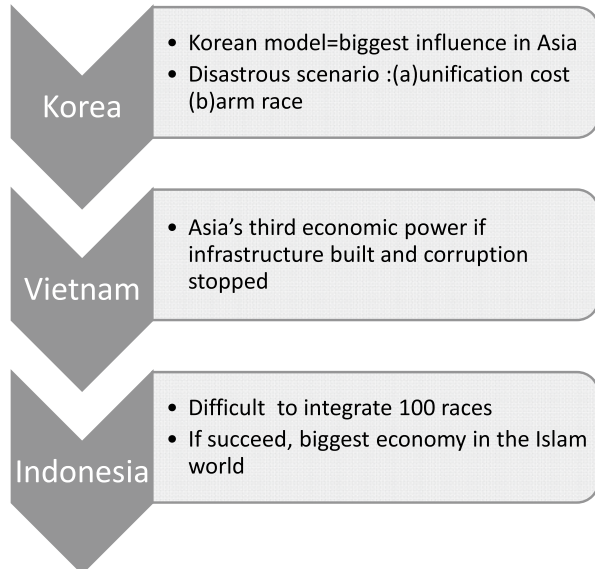
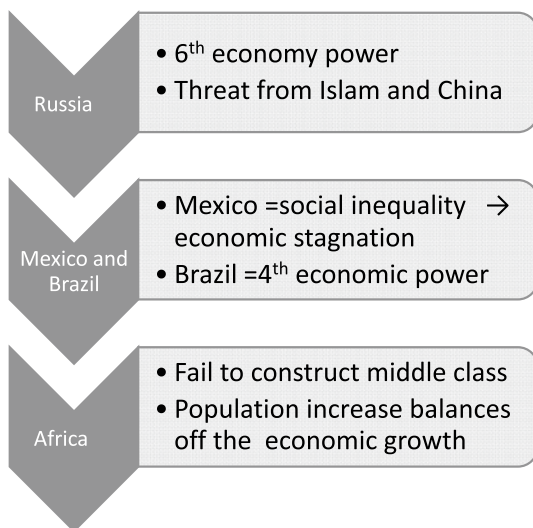


Chart 16



Arab : Lack of stable governments, separation of powers, human rights

上記のようなアタリの大胆な見方は大いに議論となるところだろう。それぞれに対してかなり厳しい見方を提示している。日本については、アタリらしく、やはり「個人の自由」がついに社会の価値として定着せず、社会全体の停滞が続くと予想する。

さてわれわれは第1の波直前にいるが、その第1の波直前の全体状況はどういうものだろうか？アタリは以下がこれからしばらく続く状況だという。

- ・市場の形成は「中心都市」なしで機能することになる

Market will function without [center city]

- ・資本主義は活力と将来性にあふれさらに支配的になる

Capitalism further gaining power with vivid and bright future

- ・資本主義の終焉を告げるものは、またしても骨折り損をするであろう

Those who predict the end of capitalism will find once again a waste of effort

以上のような見方だが、ここにはアタリの資本主義そのものへの変わらぬ支持がある。

もちろんそれは資本主義の調整能力への信頼を前提としている。さてその資本主義の核心である市場だが、彼は市場の秩序の多極化multi polarization of market order を予想する。またその中で

- ・民主主義なき市場（超資本主義）・市場民主主義の世界化

Market without democracy (super capitalism)

globalization of market democracy

- ・100以上の新国家の誕生

Birth of 100 plus new states

- ・市場は国家と和平協定を結ばない

Market will not sign peace treaty with nations

などを予想する。そうした中で、かれは超帝国の出現を予言する。

Chart 17

超帝国の出現 APPEARANCE OF SUPER EMPIRE

- ・世界の秩序は地球規模となった市場の周辺に国家を超えて統一される
World order to be built in the global market beyond nations
- ・公共サービスを、次に民主主義を、さらには政府や国家さえも破壊する
One will witness destruction of public service, democracy, and government and nation
- ・2050年、国家の解体始まる
In 2050, we witness dismantling of nations

その超帝国の性格はオブジェ・ノマドの更なる進展である。

オブジェ・ノマドの延長

New Form Of Nomadic Objects

- ・超帝国の文化（混合型）、生活様式（不安定）、価値観（個人主義）、理想（自己偏愛）

Culture of super empire (mixture), lifestyle=unstable, ideal=exclusive love to oneself

- ・徹底的な商品化と市民の孤立化

Extreme commercialization and isolation of individual citizens

- ・ 保険と娯楽が二大産業

Two major industries=insurance and amusement

Chart 18

超帝国の支配者

The Ruler Of The Super-empire

- ・ 超ノマドの出現・・・金融業・企業の戦略家、保険・娯楽産業の経営者、ソフトの設計者、発明家、法律家、作家、デザイナー、アーティスト

Appearance of super-nomad...strategist of finance corporations, executives of insurance and amusement industries, architect of soft-wears, inventor, lawyer, writer, designer, artist.

- ・ 雇われる側でも、雇う側でもない=勝者
Winners=neither employer nor employee
- ・ 地理的・文化的基盤なし・有名になるのは災難・未来の第3波の主人公
No geographical and cultural base. To became famous is mishap. The future protagonist of the third wave

Chart 19

超帝国の中産階級

The Middle Class In The Super Empire

- ・ 2040年 超ノマドの下に40億の定住サラリーマンとその家族

In 2040, under super-nomad, 40billion salaried workers and their family

- ・ 公務員たちは国家の解体を遅らせるために暴力を含めあらゆる手段をとる

Civil servants will make every effort (including violence to delay the collapse of nations

Chart 20

超帝国の下層ノマド

Lower Nomad In The Super-empire

- ・ 1日2ドル以下、2006年、25億人→2035年35億人

Lower nomad living under 2 USD/day

2006=25billion

2035=35billion

- ・ 帝国を揺るがす

Lower nomad sway the empire

第一の波、第二の波の状況 situations under the first and second wave

マネーによる暴力の後には武力による暴力がやってくる (すでにその兆候)
Violence by money ⇒ Violence by force

Chart 21 **国家の弱体化・地域紛争の勃発**
Erosion of Nation States. Spread of Regional Conflicts

- 万人の万人に対する闘争 The war of all against all.
- ソ連崩壊は世界警察の一つが消滅したことを意味する The collapse of USSR was the disappearance of one of the world police body

Chart 22

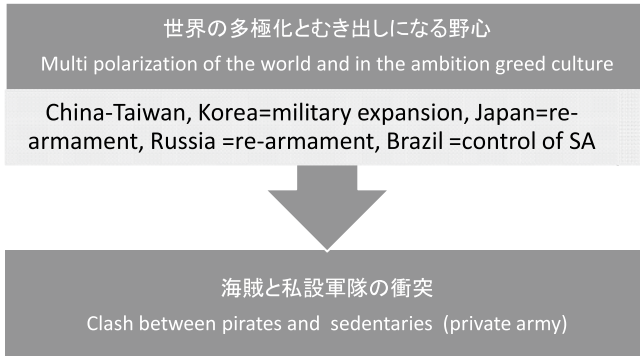


Chart 23

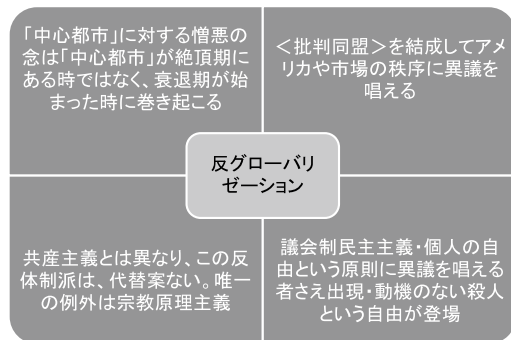


Chart 24



Chart 25

反グローバリゼーション運動の行方



ANTI-GLOBALIZATION MOVEMENTS

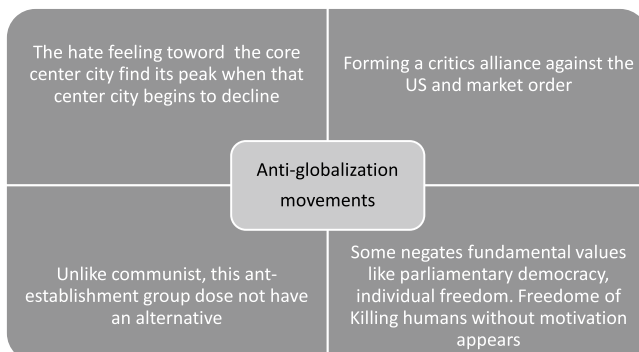
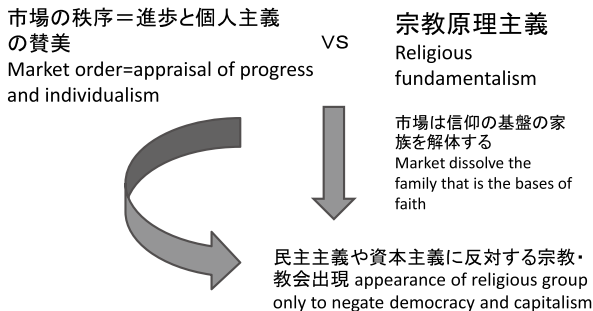


Chart 26

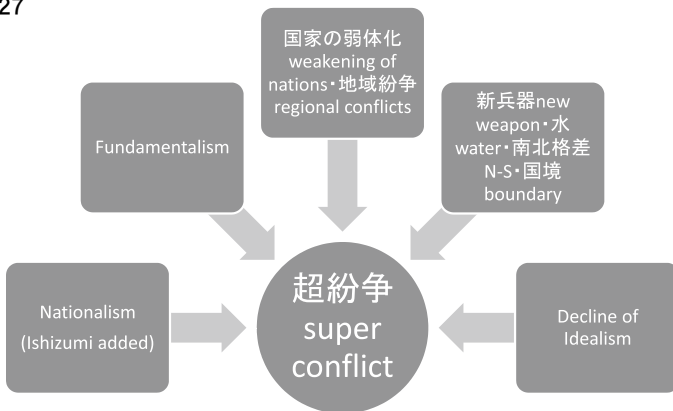
宗教原理主義の行方 The Future of Religious Fundamentalism



ユダヤ・ギリシャ哲学信奉者を追放・破壊するだけのアルカイダのような組織が増殖
proliferation of organizations such as Al Qaeda which expel believers of Judio-Greek philosophy

第2の波 THE SECOND WAVE : < 超紛争 > = < Super Conflict >

Chart 27



⇒⇒⇒民主主義は自分自身の欲望を抑え込む原動力を見出す

Democracy will find a driving force to contain one's lust

そして第3の波, super democracy の担い手が登場する。socialist ではない。

Chart 28

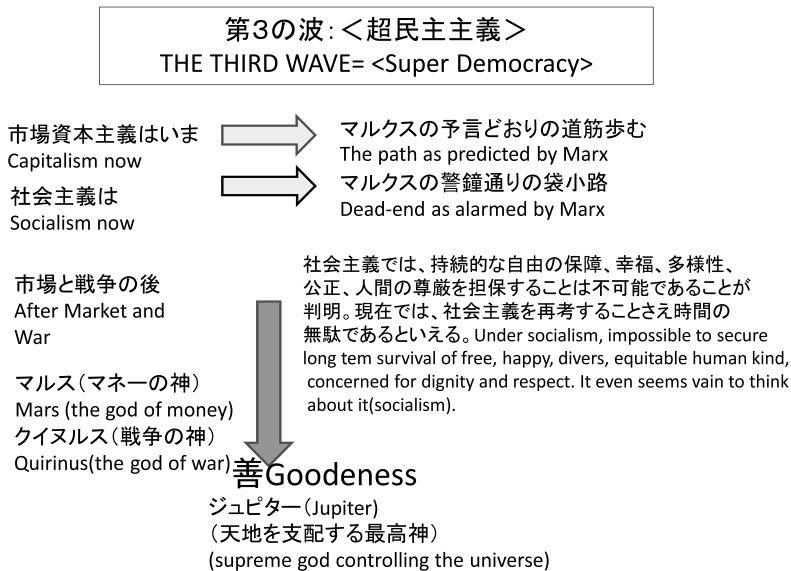
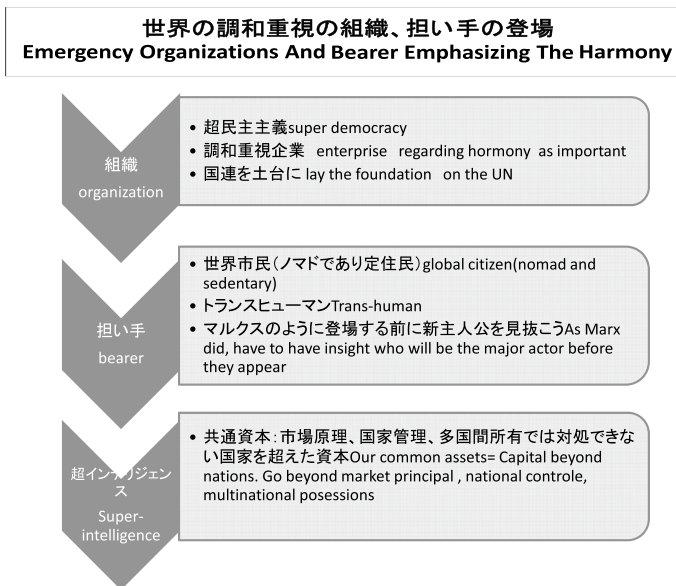


Chart 29



All charts in Chapter 3-1 Produced by M. Ishizumi, based on readings of the book “a brief history of the future” 『21世紀の歴史』

ジャック・アタリの『21世紀の歴史』に対する筆者コメント

- 1) アタリはEU成立の立役者だが、その根本思想は人間の歴史が<自由>をキーワードに展開し、これからも展開するというものだ。
- 2) 21世紀の歴史だから「予言」の本である。実証的な証明はもちろん欠けている。しかしこの本が出てからの世界の情勢を見ると、かなり当たっていると言える。
- 3) アタリのもうひとつのキーワードは<ノマド>である。日本語では遊牧民ということであるが、この<ノマド>という言葉は既に日本語としてもそのままノマドとして定着しているようだ。辞書的にいえば「時間と場所にとらわれずに働く人、もしくはそういった働き方」ということになる。freelance という言葉も当てはまる。
- 4) アタリは世界のグローバリゼーションの理論的支柱であるとしばしばいわれる。確かに彼の論じるような世界史の展開が着々と進んでいるように見える。これが各国民にとって幸福なことなのかどうなのか、という問いは大いに議論的になる。実際アタリこそが、あるいはアタリ的な歴史観、未来感こそが克服されなければならないものだという議論は数多ある。2019年の時点で言えば、ウォール街に対する批判、フランスで広がる黄色いジャケット運動と同根の様々な反グローバリゼーションの運動は多地域で多様に行われている。そして勢いを増している。
- 5) 2018年末、日本は大量の外国人労働者受け入れを可能とする新入国管理法が国会で通過した。これはグローバリゼーションの波がアメリカ、ヨーロッパから、いよいよ日本にも押し寄せてきたという見方が強くある。例えば堤未果氏による『日本が売られる』（冬幻社新書2018）などで多くの一般人も認識することになる。

3-2 4大文明 FOUR MAJOR CIVILIZATIONS

『世界は四大文明でできている』

“The World is Composed of 4 Major Civilizations”

もうひとつここで紹介する世界史の見方は橋爪大三郎の『世界は4大文明でできている』である。この書作は筆者がある研究会でレポーターとして取り上げたものだが、2018年6月には講義用資料の一部としてもレジュメを配った。その際のレジュメの抜粋をここに掲載しておく。この本の記述の順番に従って最初から要点急所を記載する。著者自身がまず質問・命題を設定し、それに対して著者の議論を踏まえた答えを提示するという質問・命題⇒答え、という形式をとっているので、このレジュメでも同様な形をとる。もちろん答えの部分は本書からの筆者（石積）の抽出が中心になっている。それぞれの項目の太字が質問・命題であり、続いて各項目に対する答えを・で示している。さらにケースバイケースで筆者のコメントをイタリック体で差し挟んでいる。

『世界は四大文明でできている』橋爪大三郎

“The World is Composed of 4 Major Civilizations” by Hashizume Daizaburou

文明とは何か What is civilization?

- ・文化を束ねる共通項を人為的に設定できる (The least common denominator which bundles culture artificially)
- ・文化よりもレベルが高い (It is higher-level than culture)
- ・多様性を統合し、大きな人類統合のまとまりを作り出すもの (What unifies diversity and makes a settlement of big human-beings integration)
- ・文字を持つ。法律や社会制度が整っている。帝国のような政治的まとまりがあるが、内部に多様性がある。(It has a character. Law and a social system are ready-made. Although there is a political organization like an empire, diversity remains.)

文化とは What is Culture ?

自然にできた共通性に基づく (based on natural similarity)

civilization は、もちろん *civil* という言葉に結びつく。さらに *city* あるいは *citizen* という言葉と関連する。これは *culture* との対比で、その影響力・広がりにおいて *civilization* > *culture* となる。土着性 (*rootedness*) という点で *civilization* < *culture* となる。日本文化とはいうが日本文明とは言わない。ドイツも *German culture*, アメリカも *American culture* となる。「文明開化」であり、通常は「文化開化」とはならない。

この議論は当然に中心 (*core*) vs 周辺 (*periphery*) の議論に結びつく。

橋爪は4大文明を論ずるにあたり宗教を中心に論じていく。なぜか？
宗教こそが人々の考え方、社会の構造を規定するからだ。

宗教とは何か What is religion?

- ・人々が同じように考え、行動するための装置 *apparatus for people to think the same way and act* 個別の言語や民族や文化を越える普遍的なもの *more universal going beyond language, ethnic group, and culture*
- ・平和に貢献 *contribute to peace*

聖典にはどんな機能があるか。What function dose a sacred [holy] book have?

- ・聖典によって相手に対する予想可能性が高まる→仲間として協力しやすくなる→ビジネスができる、一緒に政府を作る、教会や官僚機構を作る
Anticipation level increase based on sacred book → cooperation possible → better business, better governance, building church and bureaucratic system
- ・聖典を読む→複数の文明間の相互関係を考える (グローバル世界 = 単純な近代主義ではありえない) *Reading a sacred book → consider mutual relationship between civilizations (global society = no longer simple modernism)*

なぜ一神教は個人主義なのか Why monotheism leads to individualism ?

- ・裁かれるのは人間。一人ぼっちでバラバラに個人として裁かれる。

Men and women are to be judged by God as an individual

- ・人間の存在は個有名詞である（家制度の日本とは違う）

Human exists as single noun (different from Japan based on family name)

- ・各人の職業は天職。天職を通じて隣人愛を実践することが神の意思

Individuals work is calling. God will is for men to practice acts of love to others through calling

この問いは興味深い。イスラムの人々は一見集団主義的にふるまうように見えるが、じつは日本人からするとかなり個人主義の側面がある。というより日本人はどの社会に比べても個人主義的でないと思われる。

アメリカで恋愛、家族とはなにか。また左利きが多い理由。

What is love, family in America? Why many Americans are left handed ?

- ・神の主権を宿命論や決定論と混同してはならない。この世界を God と人間が共同で築いていく。それが人間の務め

Should not confuse Gods' sovereignty with fatalism and determinism.

Men and God has to cooperatively build the world.

- ・God's Match - 神が伴侶を用意。

- ・ピューリタン = 家族を大事に、カップルは愛し合うべき

Puritanism = importance of family, the couple should love to each other

- ・カトリック = 結婚は秘蹟（神の技）→離婚認めず

Catholicism = marriage is god's sacrament → divorce not allowed

- ・片方が死ねば結婚の契約は解消する→神の国では元夫、元妻として他の信徒と仲良く暮らす。

When a partner dies, the contract ends → in the heaven the couples live in good terms

- ・自然は神の技—範囲は広い—神の技は上書きしてはならない—左利き直せない

Nature is God's creation -wide ranging—never over writing—left hand should not be corrected

左利きの議論は確かに納得がいく。日本社会が特異なのか？

なぜ、キリスト教文明で、市場経済、民主主義、自然科学が発達したのか。また、現代、IPS細胞、LGBTはどうとらえられているか。Why in Christian civilization , free market economy, democracy, and science developed ?

How IPS, LGBT are seen today ?

- ・神の見えざる手—市場に神の技が働くならば、そこに人間の技が働いてはならない。⇒政経分離の主張

Market economy → separation between economy and politics

- ・市場メカニズムが働くための条件 = ①所有権の尊重②法律・契約を守ること③税金を払うこと——どんなに儲けても結果は正当化される

Conditions for free market economy to function = ①Respect for private property ②Respect for law and contract ③Payment of taxes—— one will not be blamed for maximizing profit

- ・民主主義は神の見えざる手の政治版——個々人が独立して、良心に基づいて投票。⇒当選者は聖書に手を置き、職務に忠誠を誓う

Democracy is the political version of God's invisible hand - individuals Independently vote according to their conscience → the elected will swear by putting their hands on the bible to be loyal to their duty

- ・自然はもう一冊の聖書。神の技を観察し、理性によって解明し、神の意思を明らかにする。自然科学を通じて神の計画を理解する。理性を通じて神に近づく。⇒理神論

Nature is another bible. We have to observe God's creation, understand it by reasoning, and make the will of God clearer. We have to understand God's plan through the natural sciences. We have to approach God through reason. → Deism (reason is divine)

- ・LGBT——人間が自然（神の技）を罰するのは間違いVS聖書ではゲイ

は罪と記述

LGBT - it is wrong for humans to change nature (God's creation) vs in Bible homosexuality is a sin

ここは西洋近代の理解のカギになるポイントだろう。ウエーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において議論されている点である。近代は資本主義の展開であると同時に民主主義の展開でもあるが、それはこのキリスト教の展開と直に結びつく。ただし、その近代民主主義の展開ということでは、その民主主義の原型は古代ギリシャで展開されたわけであり、その社会は多神教の社会であったという事実もある。そのことをどう考えるか、それもまた課題だ。

ビジネスのどこに、キリスト教の行動パターンが表れるのか Where in business, Christian behavior pattern prevails ?

- ・市場均衡には神の見えざる手が働いている

God's hand functions in market balance

- ・人間の技が働いてはならない→政経分離

Human acts should not function → separation between politics and economy

- ・所有権の尊重、契約（法律）を守る、税金を払う。この下でどんなに儲けても正当。

Respect to proprietary rights, contract, tax. Profit under this basis is fully allowed

- ・儲ければ儲かるほど神が私を愛してくれている。

The more you make profit, the more God loves you

欧米、特にアメリカにおいてスーパーリッチが日本のように揶揄や胡散臭さの眼で見られず、尊敬の眼差しで見られるのはこのことと関係しているのだろう。一方彼らの多くが宗教的ともいえる姿勢で慈善事業に力を入れているのは、このことと関係する。即ち儲けるのも慈善に力を入れるのもどちらも神の思し召しという考え方だ。いずれにしても利益

の追求において、人道的配慮から自らブレーキをかけるという考え方はとらない。さらに言えば、従業員の福利を考えるのは経営者でなく神の技にまかせようということになる。

イスラム教徒はユダヤ教徒とキリスト教徒をどう見ているか How Muslims looks at Jews and Christians ?

- ・イスラム教・ユダヤ教=信仰に関する基本的なことを人間はきめられない。

Islam Judaism =human cannot make decision on basic matters on creed

- ・イスラム法学の基本=人間の解釈を差し挟まないこと。

Fundamentals of Islamic law=no human interpretation

- ・キリスト教=会議で決めて良い—聖霊がはたらくから—公会議の決定が重要。(民主主義とキリスト教の親和性ありか)

Christian=can decide in meetings-because holy spirit functions-public decision important (harmonious aspect between democracy and Christianity)

- ・イスラム世界には正統な統治権力者が存在できない。教会が存在しないから。

In Muslim world, no legitimate governing power exist because no organized Church

- ・ムハムンドが死ぬとその権限を継承することができない。——これがイスラム教の悩ましい点。

After Muhammad, no one can succeed the power—this is a dilemma of Islamism

英米法にないイスラム法の特徴とは何か What is the characteristic of Islam law as compared English /American law ?

- ・イスラム法学の基本=人間の解釈を差し挟まないこと

Fundamentals of Islam law=no human interpretation

確かにイスラムの方がシンプルに神に対峙しているように思われる。

であるからこそ、過激派イスラムが生まれるのではないか。

なぜカースト制は数千年も続いているのか Why cast system existed for thousands years ?

- ・ 職業に結びついている = 相互依存 (分業) のシステム
Connected with occupation = mutual dependency system
- ・ 古代奴隷制 (所有) よりは人間的 = 古代の社会保障システム
More humane than ancient slavery = ancient social security system
- ・ 全員が結婚できる
Everyone can marry
- ・ 全員が私有財産権を持つ
Everyone have private property right
- ・ 成功した仕組みを変えるのは難しい
Difficult to change the once successful system

もちろんついにこの強固なカースト制が急速に崩れつつあるというインドの現実が様々に報告されている。筆者が最後にインドに行ったのは10年以上前になるが、その時点では、やはり驚くべきカーストの強固な岩盤があった。

インド人が互いに無関心であることとインドの神のありかたは、どう関係しているのか Indian peoples indifference to others and position of god in India?

- ・ 輪廻 (あきらめ) とカースト制はセット。様々な神を束ねるバラモン
Incarnation and cast system is one set. Brahman bundles various gods
- ・ インドの神々は互いの無関心や互いの無関係を表現する一方、それが対立や矛盾を生まない仕組みを備えている。
India's gods express indifference to each other and on the other hand holds the system avoiding conflicts and contradictions

もちろん人によるが、インド人と付き合う中で、日本人には到底なじめないほどの彼らの個人主義を痛感することが多いのではないか。同時に他者に対する無関心も。しかしまた同時に1人ひとりのインド人エリートの驚くべき個人としての能力も痛感する。放っておいたら国際機関の幹部職員はみんなインド人になるのではないかといわれるほどだ。もちろんシリコンバレーで活躍するインド人も多い。彼らの個人主義はもちろん何百あるといわれるインドにおける言語、まさしく多神教の背景などがあるだろう。さらには一神教でないことが、ある種の世俗主義 *secularism* の貫徹をもたらし、それが臨機応変な行動パターンを生み出しているともいえるのではないか。華僑 *overseas Chinese* に対して「印僑 *overseas Indian* という言葉があるが、インド人の第3世界における中・小ビジネスにおける存在感 *presence*、力はとてつもないものがある。

なぜインドで生まれた仏教がインドに根付かなかったのか。 Why Buddhism born in India did not settle in India ?

- ・ゴータマのカーストはクシャトリア (二番手)
Gotama cast was Kushatoria (second class)
- ・ヒन्दゥー教の常識的な考え方から逸脱
Buddhism aviate from the common notion of Hindu
- ・仏教はそもそも宗教でない
Buddhism is not religion
- ・仏教は明確な反カーストのメッセージ
Buddhism has the clear message of anti-cast
- ・仏教の弱点は出家 = 生産活動に携わらない。
Weakness of Buddhism is to renounce the world = not involved in productive activities

インドの人々のビジネスで気をつけるべき点はなにか。 What are pitfalls in doing business in India ?

- ・ヒन्दゥー教徒、イスラム教徒 (名前・行動)、シク教徒 (ターバン) の存在を理解すべし。

Should understand existence of Hindu, Islam, (name and behavior) ,
Sikhs (turban)

- ・ ヒンドゥー教徒は保守から都会派まで多様。

Hindu vary from conservative to metoropolitanist

開明的なインドの協力者を見つけることが重要

- ・ Important to find Indian counter-part

中国にかつて存在した科挙はどこが先進的だったのか。What were progressive aspects of "KAKYO" (higher civil service examination) existed in china ?

- ・ 儒教は能力主義、抜擢人事を理想とする。文人官僚が政治を担当。

Confucianism consider meritocracy and exceptional promotion ideal.

Literati bureaucracy should handle the government

- ・ カーストでもなく身分社会（ヨーロッパ）でもない合理的な仕組み

Rational system negating cast and class society

- ・ 農民は政府を自分たちの政府と考えることができる。人民解放軍以来の現代中国にあてはまる。

Farmers can consider the government as their own government. Fits to contemporary China since peoples' liberation army movement

最後のポイントの人民解放軍について。毛沢東はじつに見事に農民を解放軍に組織化することに成功した。一方で儒教を焚書坑儒扱いしながら、他方で巧みに儒教のメリトクラシー的側面を解放軍、さらには共産党組織運営に取り入れたのではないか。

なぜ中国の人々は家族道徳を重んじるようになったのか Why Chinese started to consider family ethic as important ?

- ・ 忠<孝の関係=オリジナルな儒教の伝統

Loyalty < Filial Duty= tradition of original Confucianism

- ・ 教育勅語、軍人勅語は儒教的用語で書かれた近代ナショナリズム

Education conscription and military conscription are expression of

modern nationalism written in Confucian language

古来、中国の政治が安全保障を優先したのはなぜか。Why china s politics consider security as the most important ?

- ・地政学的状況。農耕民と遊牧民。BC1000年頃に騎馬民族の誕生
Geo- political reality. Agricultural tribe vs Nomad . An equestrian born
B.C 1000

- ・中国農民のコンセンサス = (1) 政府を統一して騎馬民族に負けない正規軍の編成 (2) 万里の長城 (3) 税金は負担 (4) 工事に協力、兵士にもなる

Consensus of Chinese farmers= (1) unify the government and formation of formal army against equestrian (2) long castle (3) prepared to pay tax (4) contribute public works and become soldier

中国共産党のあり方と儒教の考え方にはどんな関係があるか。党幹部はどのように決まり、そのやり方は日本とどう違うのか。What are the relationship between Confucianism and CCP ? How do they decide executive members?

- ・中国は放伐、禪譲、世襲を組み合わせてその時々で最善の政府を模索。
Chinese choose military leadership, appointment from the previous leader, hereditary according to the situation
- ・中国共産党は巨大組織（8800万）党が単位をしっかりと握っているのがソ連共産党との違い。

CCP grasp each unit firmly -different from Russian CP

- ・単位を党が一元的に管理。能力主義・抜擢人事（儒教的伝統）で組織を越えた人材登用可能。

CCP centralized management the unit. Meritocracy and exceptional promotion apply

- ・ML主義と伝統中国システムの合体

Combination of ML ism and traditional of Chinese system

なぜ日本は文明ではないのか。Why Japan is not a civilization ?

- ・普遍的な価値をそなえていて世界にそれを認めさせたいと思っていない。
文明として行動していない。

Do not wish to possess and spread to the world universal value. Do not act as civilization

- ・ 外の世界から、自分たちに必要なものを取り入れること「だけ」に今も熱心

Interested *only* in adopting /absorbing necessary things from outside the world

日本人々にとっての「神」とはなんのことか。What is god to Japanese people ?

- ・ 仏と、神と、天皇とみんな価値ある。それ以上のものは浮かばない。

Values Buddha, god, Emperor, nothing above

- ・ 中国で神はトップランクでない。トップランクは天

In china, god is not the top ranking, top ranking is Heaven

- ・ カミには3種類（本居宣長）(1) 古事記・日本書記のカミ (2) 神社に祭られているカミ (3) なにかが平均値を逸脱して感動する「あわれ」と思うもの。——カミ風、カミ鳴り、カミわざ、カミ対応——まことに正しいカミの用例。

Three different KAMI (1) KOJIKI,NIPPONSHOKI (2) KAMI worshipped in Shinto shrine (3) things and phenomena beyond normal-aware-god wind, thunderstorm, gods technique, gods behavior

- ・ 自然の作用を人格化したもの

Humanization of natural phenomena

- ・ カミは日本の自然。仏はインドの知識人。

KAMI is Japans' nature. Buddha is Indian intellectual

- ・ 本地垂迹説でカミ = 仏になった。仏教と神道を区別しなくなった。

KAMI became Buddha. Buddhism and Shintoism no separation

日本の組織が意思決定するときの特徴はなにか。また「ムラ社会の原理」は本当に日本の伝統なのか。What is a trait of Japan in decision making process ? Is "principle of village society" really Japanese tradition?

- ・ 特徴 (1) 会議の場で実質的な議論がない (2) 誰が意思決定したか
- ・ 不明 (3) その意思決定の理由も不明

Character (1) no real discussion of the meeting (2) no one knows who decided (3) no clear reasons for the decision

- ・ 空気の支配—対英米開戦の決定。

Governing by air -decision going into the war

- ・ 洋学が学問の基本となって変化—成文化されていない不可視のルールに縛られているのを企業で発見。

Western learning became basis for education—one find in the company life, rules not stipulated actually governs

- ・ ムラ社会の流儀はごく最近の習慣

Style of “village society” is recent habits

今また「空気の支配」の日本の弱点が露呈されているのではないか。今に始まったことではないが最近とみにセクハラ・パラハラがらみのスキャンダル暴露競争の中で空気の支配が猛烈な勢いで力を得ようとしている。その中で個人としての言論の自由は急速にしぼんでいる。マスコミの質がいよいよ問われている。日本の言論の自由度は世界で67位。長い日本社会の伝統の中で「ムラ社会の流儀はごく最近の習慣」であると橋爪は述べるが、そしてその点については大いに議論あるところだろうが、すくなくともその「ムラ社会の流儀」がとどまるところを知らず、いよいよ強固なものになっている。

日本人が「物まねのうまいサル」と思われたいためには、どうすればよいか。

How to overcome “imitator monkey”?

- ・ ムラの原理を越える

To go beyond the principle of village

- ・ ポリシーペーパー（基本政策文書）の重要性

Importance of policy paper

- ・ 異質な他者がいることを想定しない日本企業、日本社会 = コストの節約

Overcome company air with no recognition of others.

- ・ 世界の人口は73億人。日本人は1億人。

Japan has only 1 billion ,the world has

具体的には？宿題。Assignment

最後の宿題は難問だ。

ひとつにはやはりどれだけ多くの人が個人として具体的に他者、特に文化や宗教の異なる他者に体験的に向き合うことができるか、その機会を社会として、特に若者に提供できるかということではないか。

Chapter 4 近代化のプロセスを考える ON MODERNIZATION

歴史は回るのか、進歩するのか？ Dose history repeat itself or make progress ?

Chart 30

歴史は回る？

History repeats itself ?

進歩史観否定？

Negation of progressive view of history

輪廻転生？

Cycle of reincarnation

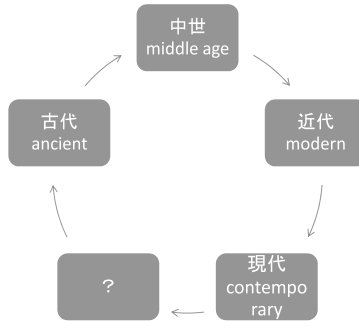


Chart 31

歴史は進歩する???

History makes progress???

歴史の進歩とは何か？

What is the “progress of history”?

[苦痛からの解放]

Liberation from suffering

自分が責任を負う必要のない苦痛からの解放

Emancipation from the pains for which one is not responsible

4 - 1 近代化の社会変動PART I

SOCIAL CHANGE IN MODERNIZATION PART I

Chart 32

社会変動 (social change)

- Who leads the change?
- What is their new design?

Chart 33

社会変動 (social change)と歴史のブレイクスルー (historical breakthrough)

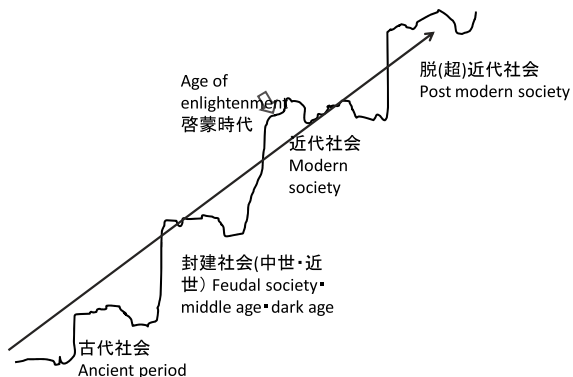
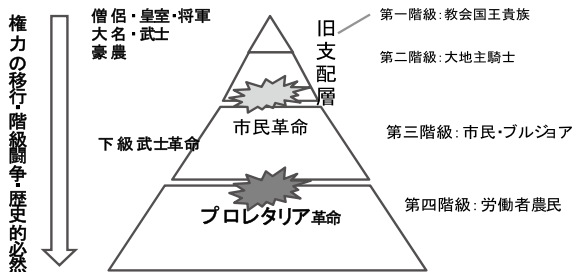


Chart 34

社会変革の担い手



Leaders of Social Change

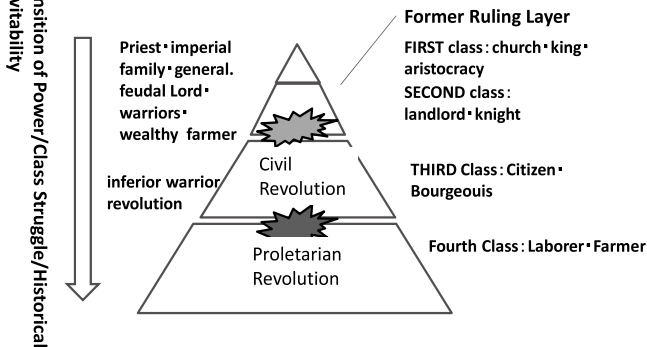


Chart 30-34 : Original production by M.Ishizumi

社会変動に関する筆者コメント

歴史は回るのか？歴史は進歩するのか？というのは時々いろんなところで話題になるが、筆者は基本的に歴史の進歩を信じている。ただし歴史の進歩とは何かという根本的な問いは若い世代にも大事だと思う。じつは筆者は大学時代にこの問題についてそれなりに根を詰めて考えた。そこで手にした本が、ずばり『歴史の進歩とはなにか』（市井三郎）という本だった。その時出会った市井の定義を記載したのがChart 31のものだ。これを基準にして筆者はベトナム戦争反対の立場を得た。黒人解放の立場を得た。女性の解放、地位向上についての原則的立場を得た。この原則的立場を学生時代に確実にしていたこともあり、国連職員としていわゆる第三世界での勤務の中でも、具体的な問題に対する判断基準を持つことが可能になった。その後の仕事や行動でも指針となった。

歴史はジグザグがあっても基本的には進歩するというのが筆者の立場だ。しかし歴史は自然現象ではない。歴史を動かすグループがある。そして当然その人々のアイデアがある。それが上記Chart 33とChart 34で示したものだ。もちろんこのように歴史をみることには異論もあるだろう。特にChart 34の左側の立てラインについては異論がる人も多いと思う。あくまでも一つの見方だからこの点は注意することが大事だ。世界（といってもヨーロッパ中心だが）と日本の歴史変動の主役についてもいろいろと「それは違う」「納得できない」という人もいるとおもう。考える出発点にしてほしい。

4-2 近代化の社会変動PART II

SOCIAL CHANGE IN MODERNIZATION PART II

さて世界の歴史の中で現代社会に最も影響を及ぼしているのは良くも悪くも近代の成立だ。この点にはほとんどだれも異論がないだろう。このトピックを扱おう。

Chart 35

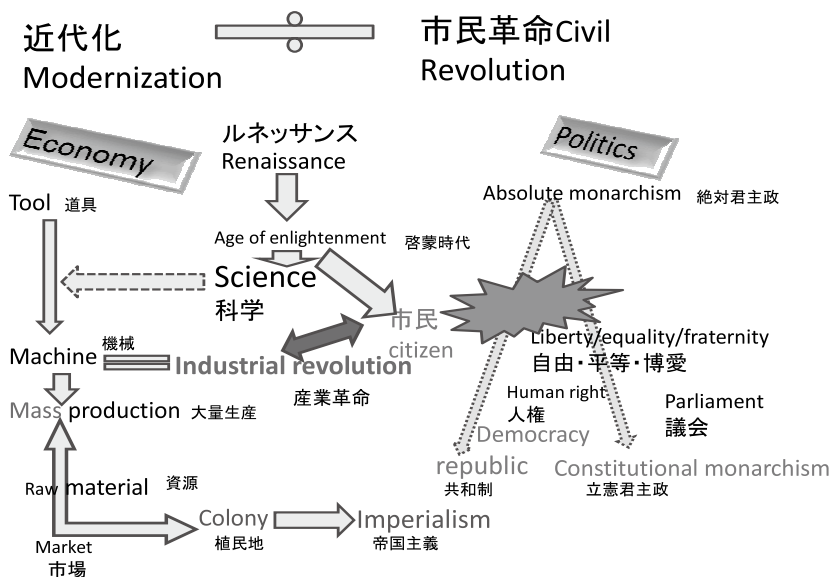


Chart 35に関するコメント

- 1) 近代化はどのように起こったのか。それを理解することは現代を理解することに直結する。もちろん近代社会は大きな曲がり角に現在ある。特に21世紀に入ってからそれは顕著だ。しかしやはり近代はそう簡単に乗り越えられない。乗り越えるにしても近代をはっきりと理解しておくことが大事だ。特に日本にとっては大事だ。
- 2) ルネッサンスを一応の出発点として政治と経済の両面から見ていく。その中で筆者はどうしても政治を考えるから、近代化=市民革命ということになる。一方経済ももちろん大事だ。こちらの方は産業革命がキーワードのひとつになる。現在は第三次とか第四次とかの産業革命の真ただ中であると言われるが、それにしてもこの時代の産業革命からすべてが始まったと言ってよい。
- 3) 民主主義は大きな挑戦を受けているが、それに代わる政治の仕組みがすぐに見つかるとも思えない。自由や、平等や、人権なども依然としてわれわれの共通項として生き続けている。このコメントを書いている現在、

日本ではカルロス・ゴーン問題がクローズアップされている。じつはこの問題はすでに世界問題となっている。人権や自由の問題に対する一段深い理解なしに、われわれは民主主義を標榜する先進国の一員と胸を張っていけない状況だろう。

- 4) この点で日本人として大いに気にしなければならないデータがある。それは「報道の自由度ランキング」(国境なき記者団)だ。2018年現在、世界で日本の報道の自由度は67何位だ。どれだけ言論の自由、報道の自由が確保されているかは、人権や民主主義の問題と一直線に結びつく。専制国家に対して自由国家という言い方がよくされる。われわれは自由国家に生きていると簡単に言うが、それがじつはかなり危ういものだということを自覚した方がよい。

Chapter 5 近代化の2側面

TWO ASPECTS OF MODERNIZATION

5-1 近代化と文明と文化の関係を考える

ON CIVILIZATION, CULTURE, AND MODERNIZATION

Chart 36

国家イデオロギーとしての文明と文化
"Civilization" and "Culture" as national ideology

近代国家の中で文明と文化というイデオロギーが、いかなる役割を演じたか？という問題

What kind of role did the ideology of "civilization" and "culture" play in modern state building

Chart 37

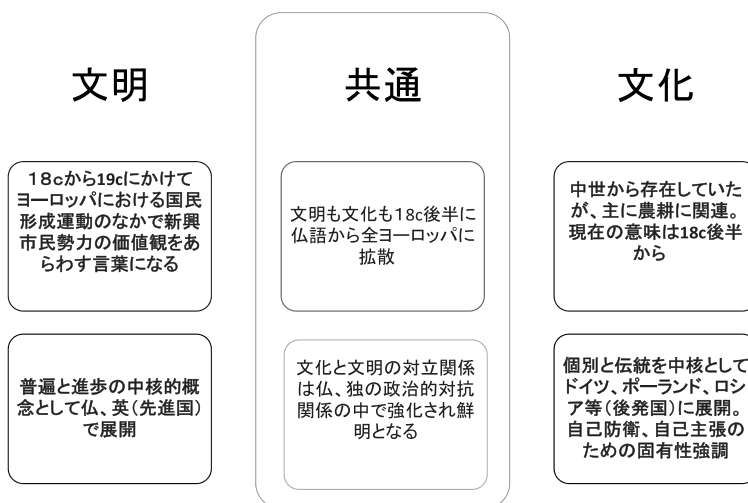


Chart 38

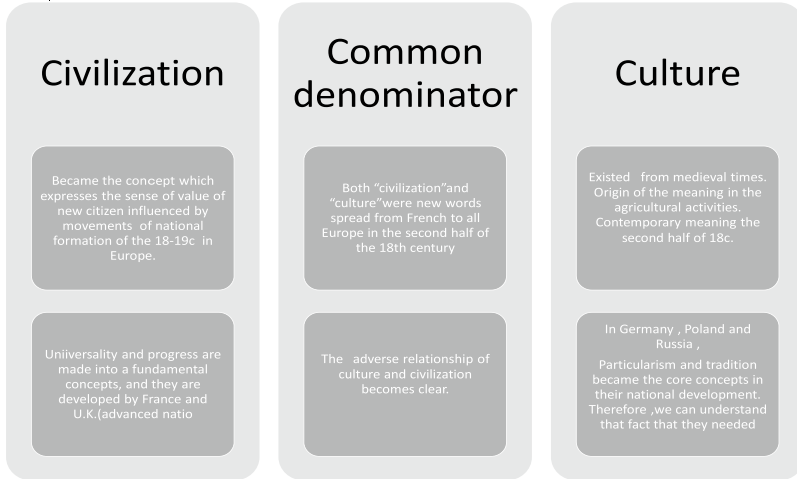


Chart 39

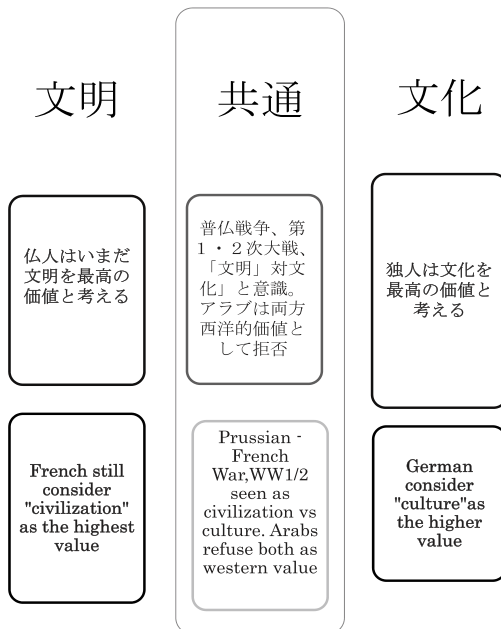


Chart 40

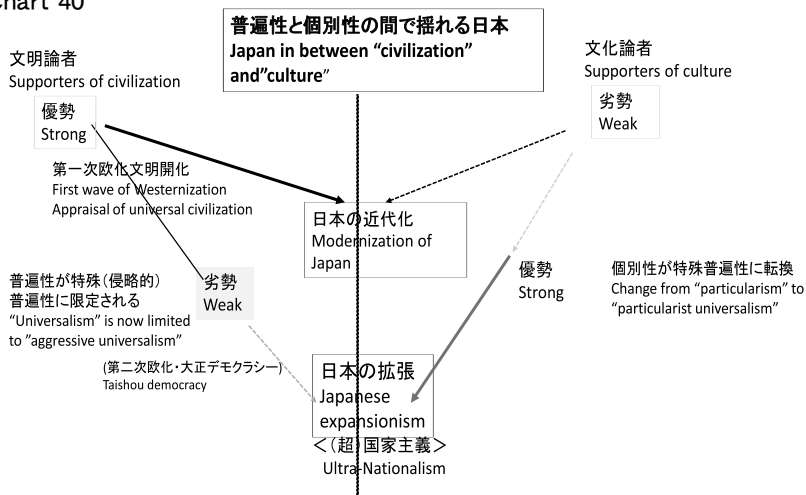


Chart 35-39

Produce by Ishizumi, inspired by the book 『国家イデオロギーとしての文明と文化』 “Civilization” and “Culture” as national ideology 西川長夫

5-2 近代化の3パターン

THREE PATTERNS OF MODERNIZATION

近代化は経済の面と政治の面だけでなくさらに大きな社会変動をもたらした。それは人々の帰属意識 (sense of identity) の大きな変化だ。つまり近代化によってそれまでの社会が大きく変わり大社会状況 (expanded society) ともいえるものが出現した。その小中社会状況⇒大社会状況に対応する仕掛け a device; a mechanism; works; a contrivanceが必要であった。その仕掛けの典型的な三つのパターンを下記に示す。最初にそうした状況を生み出したイギリス、ヨーロッパからはなれて実験 experimental 国家として成立したアメリカ合衆国、そして遅れて近代社会に入った日本のケースだ。

Chart 41

大社会状況の性格 Characteristics of Expanded society

- ・国民悪識・大新聞 Nationalism, Nation- wide papers
- ・国家官僚の支配 Ruling by National Bureaucracy
- ・市民ではなく臣民 Subjects (not citizen) Mentality
- ・平等民主主義 Substantive Democracy
- ・出世民主主義 Status Democracy

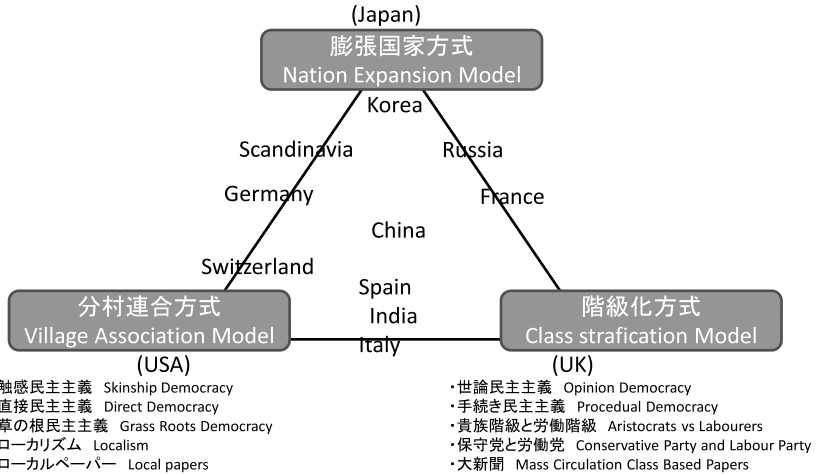


Chart 42 Originally appeared in p. 32 of the Article “Japanese modernization process and the crisis of Political Party Politics in Japan”. Project Paper No.10/2004, IIBM. Chart expanded and modified. 参考文献：『地方の時代政党に未来はあるか』所収「日本の近代化プロセスと政党政治の危機」No10・2004IIBM

- 1) 詳しい議論は上記プロジェクト・ペーパーを見てほしいが、まず世論民主主義、触感民主主義、出世民主主義はいずれも政治学者故神島二郎の造語である。日本語としても定着していない。ただそれぞれの民主主義の本質をよくあらわしていると筆者は考える。付随する言葉については神島の提示+筆者の考案である。
- 2) この大社会状況は今日さらに大きな超大社会状況ともいえるものになっている。つまり近代成立時から絶え間なく社会は大状況に移行し、人々

の生活実態 actual conditions もそして人々を結びつける仕掛けも急激に変化していると言える。その典型的なものがインターネットの登場である。例えば日英における大新聞、米国におけるローカルペーパーの役割変化は典型的な例だ。

- 3) しかしこのモデル提示はそれぞれの社会の原点 [fundamental base?] の性質理解に役立つとの確信に変わりはない。

Chapter 6 近代化以降の世界

THE WORLD AFTER MODERNIZATION

6-1 90分の世界地図 A MAP OF THE WORLD IN ONE HOUR

Chart 43

Grasping the world in one hour!

世界を一時間で理解する

A map of the world in time and space

世界を大時間と大空間でつかむ世界地図

- 1) 18世紀以降の世界の歴史を90分で理解するという大胆な試みだ。
- 2) そのため以下気ワードを使うので、この言葉については事前に理解しておいてほしい。これは予習として自分で調べておいてほしい。

Chart 44

Key words

- Modernization ---political and economic
- The first world ---free market economy/capitalism
- The second world---planned economy/socialism
- The third world---developing countries
- North-South problem
- The cold war and hot war
- Ideology

Chart 45

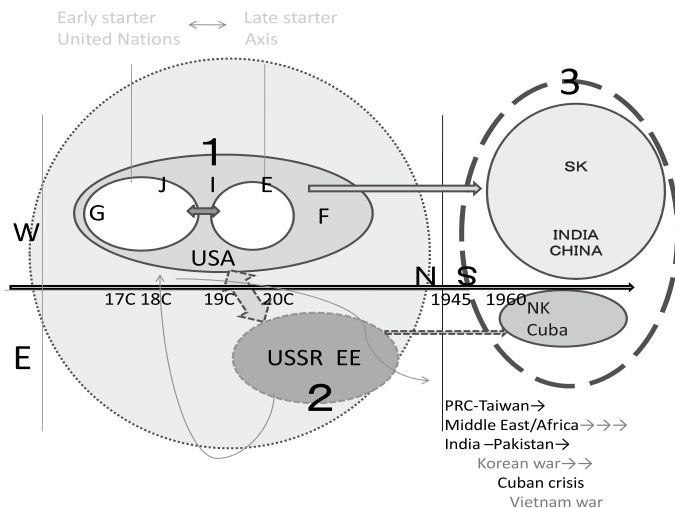


Chart 42-45 Original production by M. Ishizumi,

このChart 45は近代化以降の世界の流れを90分で概観するものだ。ただしこのChart 45は2000年ごろに作られている。21世紀の現実には反映されていない。

- 1) 世界は二つの軸 axis で動いてきた。ひとつの軸は東西の軸、もうひとつの軸は南北の軸。さらに重要なのは中央を貫く横のライン horizontal line だ。
- 2) 日本ではUnited Nations は国連であるが。中国語では「連合国」である。このことは注意が必要だ。
- 3) 第二次大戦の背景として後発国が先発国に殴り込みをかけた stormed in for a fight、make a raid というのはひとつの見方として成り立つだろう。

PART 3 日本を考える ON JAPAN

このPART 3では日本についての予備知識がほとんどない交換留学生を念頭に置き筆者なりに日本のこれまでの大きな流れを説明する。日本人参加学生にも考えてもらいたいと思っている。明治以降の日本の流れについてはあくまでも論争的な取り上げ方をしている。当然ながらオーソドックスな近・現代史とはかけ離れたものになっている。経験上中立無臭な歴史経緯の説明はクラスの活力につながらないことが分かっている。またいわゆる正史的なものは数多あるのでそれは興味ある学生には紹介することにしてはいる。あえて大胆にJapan in 90 minutes として提示している。

Chapter 7 明治以降の日本 JAPAN AFTER MEIJI

Chart 46

7-1 Japan in 90 minutes

(History and Politics of Japan Since Meiji (明治・めいじ))

———— An overview ————

PART I : 1868-1945 : Entry into modern (きんだい、近代) state (こっか、国家)

- ① Major events = colored by wars (せんそう、戦争)
1894 Sino-Japanese war (にしんせんそう、日清戦争) …Taiwan (台湾)
1904 Russo-Japanese wars (にちろせんそう、日露戦争) …Korean peninsula (ちょうせん・はんとう、朝鮮半島)
1914 World War I (だいいちじ・せかい・たいせん、第一次世界大戦)
1945 World War II (だいにじ・せかい・たいせん、第二次世界大戦)
- ② Slogan employed = Rich Nation, Strong Military (ふこく・きょうへい、富国強兵)
- ③ Constitution = Meiji Constitution (めいじ・けんぽう、明治憲法)
Sovereignty resting in the Emperor (てんのうしゅけん・天皇主権)
- ④ Characteristic of democracy (みんしゅしゅぎ、民主主義) =
Substantive (not procedural) democracy
- ⑤ Social Ethos = Confucianism (じゅきょう、儒教)

PART I 関連での解説・コメント

- 1) まず日本が遅れて近代国家の仲間入りを果たしたことについてのべる。交換留学生にはそれぞれの国や社会が、この時代にどの様な状況にあったかを振り返ってほしい。ここでは当然、欧米列強による植民地化 (colonization) の問題が指摘されるだろう。この問題、つまり遅れて近代 (late starter of modernization) に突入した日本の問題、植民地化の問題は次回以降の国際政治学関連のトピックスで扱われることになるが、こ

の時点での参加学生からのインプットが重要だ。

- 1) 明治以前の日本の状況 (Japan before Meiji) については日本人学生から説明してもらいたい。サムライ Samurai とか士農工商 the classes of warriors, farmers, artisans and tradesmen とかが一つのキーワードになる。
- 2) 台湾や朝鮮半島が日本の領土であったことを知らない日本人学生は多い。欧米からの留学生も知らないケースがほとんどだ。
- 3) ②③④は後半で取り上げる現代の日本政治文化 current political culture of Japan でさらに論点を明確にする予定だ。ただこれからの講義で筆者が触れることになる、例えば明治憲法と日本国憲法との中での一般ピープルの位置づけなどについては、特に日本人学生については少し考えておいてほしい。We, Japanese people で始まる日本国憲法は日本語では「日本国民」となっている。確かに people は国民という意味もあるが普通は人々とか人民だ。実際中華人民共和国は Peoples' Republic of China であり、朝鮮民主主義人民共和国は DPRK (Democratic Peoples Republic of Korea) では人民である。このこととの関連では戦前の憲法すなわち大日本帝国憲法 (The Constitution of the Empire of Japan) では国民という言葉は表れない。国民に対置される言葉は Subject となる。Subject は臣民である。この臣民という言葉の意味を特に日本人学生には考えてほしい。臣民のなごりで大臣というような言葉もある。

PART II : 1945-1990 : Recovery from the war and economic strive (けいざい・努力どりょく)

- ① Major events = colored by economic success (せいこう・成功)
 - 1945-51 Occupation (せんりょう、占領) by the US
 - 1950 Korean War (ちょうせん・せんそう、朝鮮戦争) Reverse course, Jap-US security treaty (あんぼ・安保)
 - 60' Vietnam War
- ② Slogan employed = Peace (へいわ、平和) and Making Money (かねもうけ、金儲け)

- ③ Constitution = New Constitution (しん・けんぽう、新憲法)
Article 9 (だい9じょう、第9条)
Sovereignty resting in the people (こくみん・しゅけん、
国民主権)
- ④ Characteristic of democracy = American democracy introduced
- ⑤ Social Ethos = Individualism (こじんしゅぎ、個人主義) injected, preceding
ethos

PART II 関連での解説・コメント。

- 1) 戦後の日本、あるいは日本人はもっぱらそのエネルギーを経済発展に集中した。戦後復興 recovery from the war and reconstruction of Japan では二つの戦争が追い風 a following [favorable] wind; になったことを指摘したい。
- 2) 留学生にはなぜ日本が戦後 miracle とさえいわれるような経済発展 development; growth; 〈拡大〉 expansion; をしたかその理由を色々と考えてもらいたい。この点では交換留学生ほぼ全員がとっている Japanese Management や Japanese Business のクラスなどで議論されたことをクラスで紹介してほしい。日本人学生は経営学関連の科目で学んだことなどに触れながら、当然いろいろと話ができるだろう。
- 3) ②③④⑤についてはPART I の解説・コメントと連動して考えてもらいたい。

PART III : 1990's and today:

- (1) End of high growth economy, Economic slump
 - (2) End of ideological race (the fall of USSR)
- Japan's economic and political re-setting not yet seen (very fluid situation)

Economic challenges

regulated system → deregulation
(state capitalism) → (free market capitalism)

(govn owed corp.) → (privatization)

traditional area → venture area

Political challenges

bureaucracy > political circle → political circle > bureaucracy

(strong iron triangle) -----> (cracking the triangle)

(lack of accountability) -----> (accountability)

(politicians) -----> (statesmen, star politicians)

(political apathy) -----> (political participation)

central control -----> local independence

old political party map -----> new political party map
(free market economy VS welfare economy)

Social challenges

strong community society → atomized society -----> ?
(how to create a new community)

stable society ethos → confusion/lack of social ethos
-----> ?

internationalism -----> nationalism
(responding to difficult/
crisis situation)

上記 Japan in 90 minutes 関連での解説・コメント

- 1) 現代日本について考えるときにどうしても押さえておきたい年がふたつあると今まで筆者は言ってきた。ひとつは1868年でありもうひとつは1945年だ。この二つの年を境にして日本は大きく変わった。現代日本を理解するときにどうしても外せない年だ。もちろん1868は封建時代から近代社会への大転換だ。1945年は戦後の日本の出発点だ。これぐらいは

日本人学生の常識だろうが、留学生には常識でない場合が多いから、これは強調しなければならない。

しかし現代日本を理解するにはもうひとつ重要な年がある。それはバブルの崩壊と冷戦構造の終焉だ。これが起きて、日本は大きく変わり、今もその影響の中に日本はある。もちろん世界にとっても大きな出来事だったが現代日本の理解にはどうしても欠かせない出来事だ。それがPARTⅢの(1)と(2)だ。そのなかでJapan's economic and political re-setting not yet seen (very fluid situation)ということになる。

- 2) PARTⅢでは現代日本が直面する問題を大きく経済・政治・社会に分けている。時間があればそれぞれについてクラスの中でも考えたいが、こうした諸問題については個々の学生が自分の興味に従って少し調べてほしい。多くの場合は左の状況から右の状況に状況が変わっているが、中にはそうあってほしいとの筆者の願望、すなわち価値判断も含まれている。

なおこのPARTⅢは2010年ごろに書かれていることには注意が必要だ。日本についていえばグローバリゼーションが無条件で叫ばれている時期であり、経済的には小泉・竹中路線が全盛のときである。その後の日本内外の状況変化の中で単純に左から右に移行すればよいということでないことははっきりしている。つまりグローバリゼーションの矛盾が徐々に出てきているということにも注意が必要だ。

- 3) とにかくこのPARTⅢはまさしく現代日本社会の問題であり、今後のクラスの中での議論で何回も扱うことになる。

Chapter 8 日本の政治文化
ON JAPANESE POLITICAL CULTURE

8 – 1 TRIPLEX STRUCTURE OF JAPANESE POLITICAL CULTURE

Chart 47

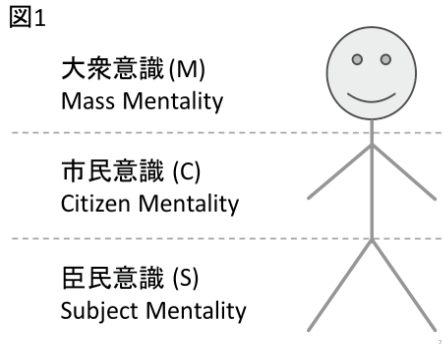


Chart 48



Chart 49

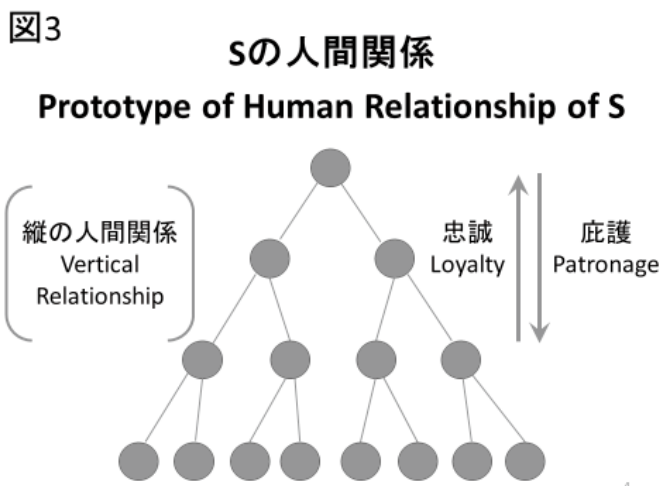


Chart 50

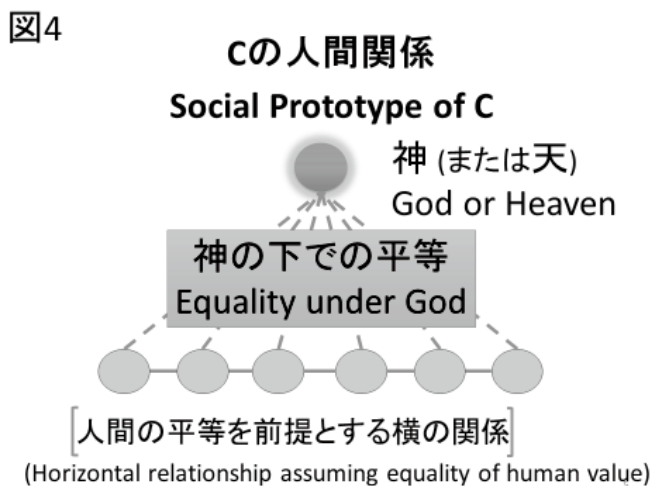


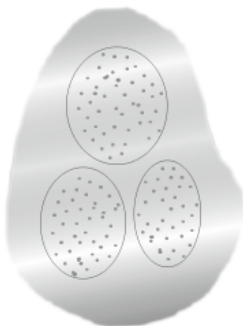
Chart 51

図5

Mの人間関係 Social Prototype of M

アメーバ状の人間関係。
しかしグループ意識もある。
時にはく大衆>に対して
<分衆>という言い方もある。

Amoeba-like human relationship.
Some group mentality.
Sometimes, we name it "Divided
Mass" as against "Mass".



6

Chart 52

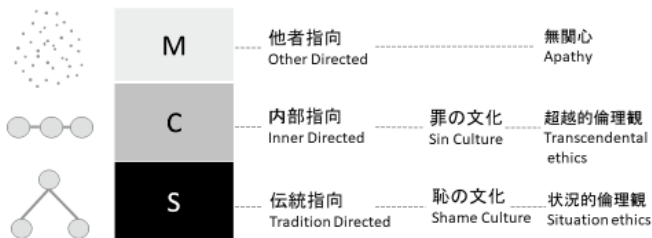
図6

人間関係
Human
Prototype

政治文化の三重構造
The triplex structure of
Political Culture

リースマンの三類型
David Riesman
"The lonely crowd"

ベネディクト
Ruth Benedict
"The Chrysanthemum
and the sword"



7

Chart 47-52

Original production by Ishizumi, first appeared in 「日本政治文化の三重構造性」(国際経営論集2000)

参考文献

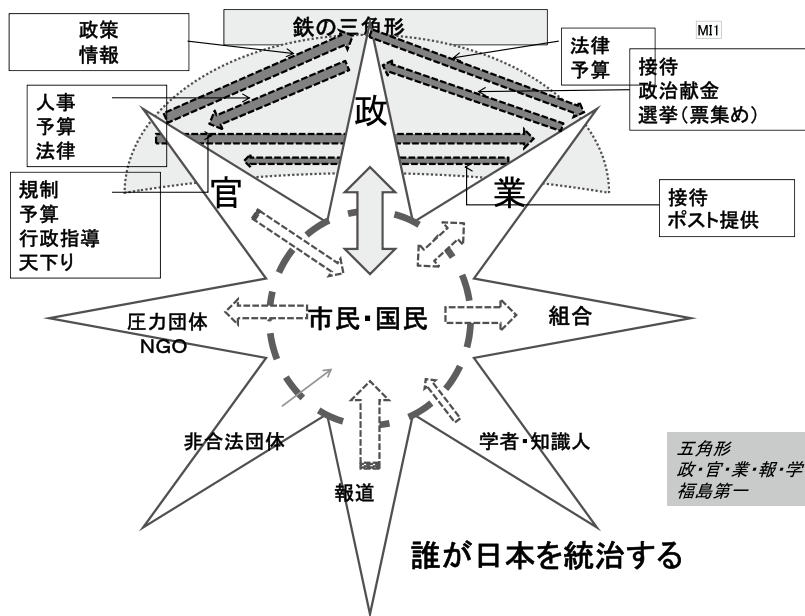
- * 『政治権力の実態：仮面をつける政治』原田鋼 お茶の水書房、1989
- * 「再び挑戦を受ける『日本』というシステムとアドミニストレーター」論壇時評、神奈川大学評論2010年11月石積勝

Chapter 9 誰が日本を動かす？ WHO GOVERNS JAPAN ?

9-1 鉄の三角形 IRON TRIANGLE

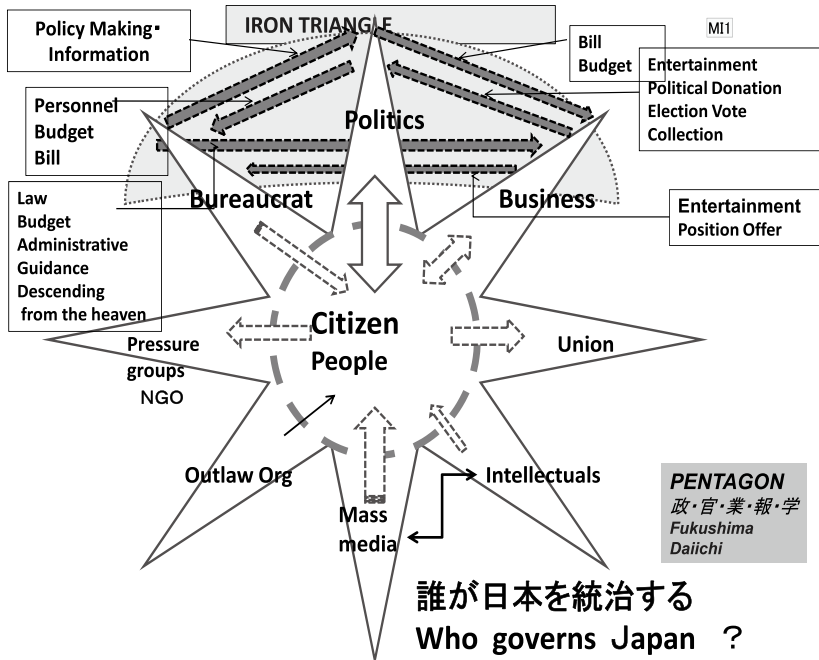
以下のChart 53は筆者ひとつの見方。制度としての3権分立など重要な点にここではふれていないが、現実には迫ろうというひとつの試みだ

Chart 53



参考文献

- * 「再び問われる日本というシステムとアドミニストレーター」 神奈川大学 評論 石積勝

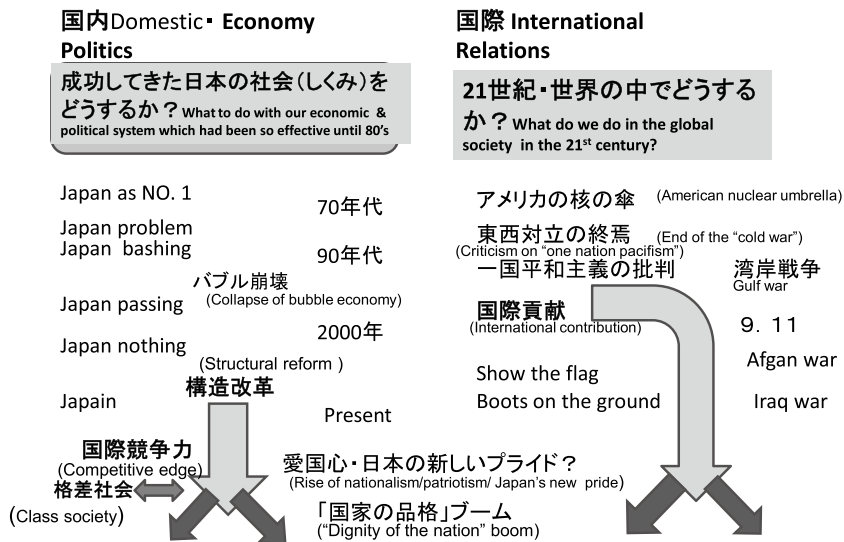


Chapter 10 日本の選択 JAPAN'S CHOICE

Chart 54 は70年代以降の国内問題と外交問題の大きな動きを扱ったもの。現在（2019年）の問題には十分迫ってはいないが、背景がある程度はわかるはずだ。

Chart 54 Original production by M. Ishizumi

Japan after 1960's and the future



PART 4 現在 / 未来
PRESENT AND THE FUTURE

Chapter 11 三つの戦争を再考する RE-THINKING OF THREE WARS

このチャートは既に発表しているものを手直しし、新たに英語訳を付けたものだ。2019年の現在、すでにこれらの戦争の記憶は薄くなりつつあるが、しかしこれらの戦争の本質を総括 epitomisation/recapitulation しておくことの重要性は依然として大きい。

それにしても、イギリスなどでは本気でイラク戦争の総括を行なったといえる。当時の首相ブレアへの判断がどのようなプロセスでなされたのか、その判断が正しかったのか、個人の責任を追及するというのではなく、未来への教訓 lesson という視点で総検証が行われた。わが国は政治家も国民も健忘症 amnesia にかかったように、この3つの戦争の記憶はほとんど歴史のなかに消えつつある。やはり多くの兵士を送りこみ、犠牲者を多数出した国と、そうでない国の当事者意識の違いだろうか。それで済む話ではないような気がする。今後の日本の国際問題に対するスタンス形成に関係する話だろう。改憲論議にも直結する。

Chart 55

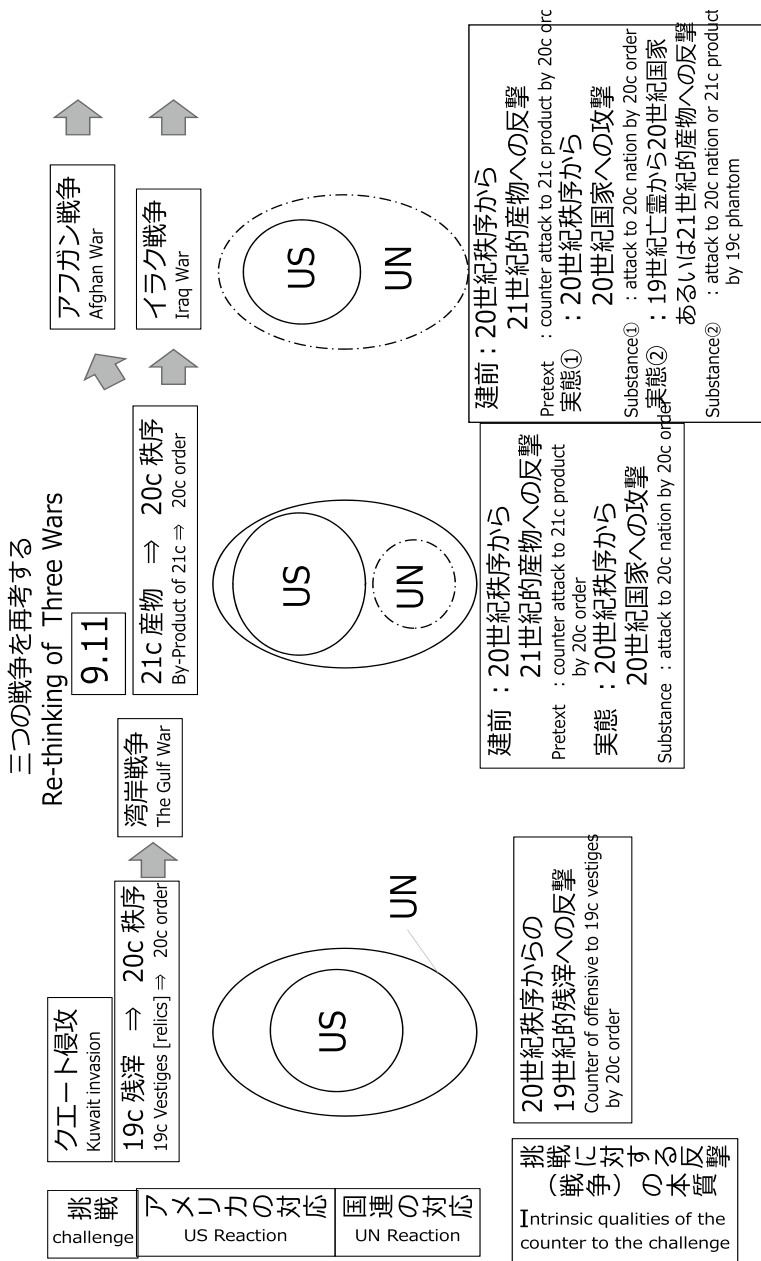
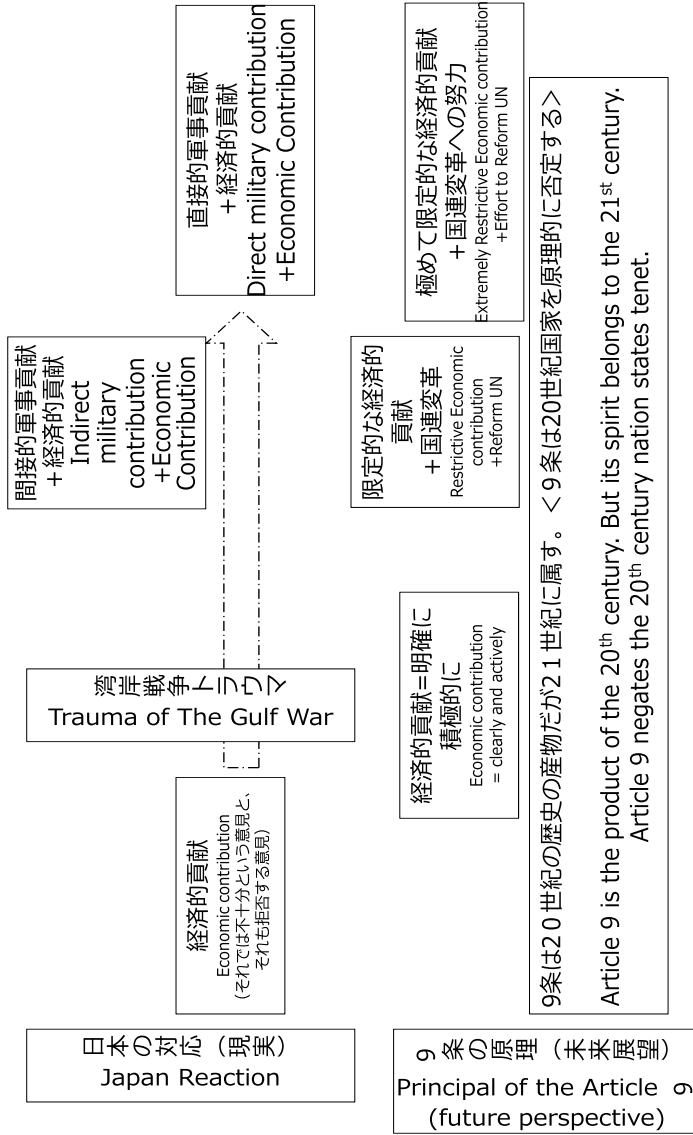


Chart 56



Partial publication in the Article "re thinking of the three war" IBM forum 2008, by M.Ishizumi, expanded and modified in 2018.

参考文献

- * 「三つの戦争を再考する」国際経営フォーラム No.10 石積勝「現在の国際政治状況と国際政治<学>状況に対するオルタナティブな一試論」project paper No.21/2010『国際政治再考に向けて』大森みきひこ

Chapter 12 平和憲法 THE PEACE CONSTITUTION

12-1 日本の特別な意味 ただひとつの被爆国

Japan-the only country A-bomb was dropped

Obama speech

2016年5月のオバマ大統領の広島訪問はやはり大きな出来事だった。そしてなかなか感動的なスピーチであったことは多くの人々が認めるところだろう。

日本はまさしく世界ただひとつの被爆国で、そのことは日本人はもちろんだが、外国人も強く意識していることはよくわかる。実際に留学生と話をすると日本人以上に広島・長崎に関心を持っているケースが多い。

問題はその先のことだ。つまり広島・長崎のことは留学生もよく知っているのだが、憲法9条となるとほとんど知らない。じつはこのChapter 12の12-1-3「9条は『近代国家』への挑戦状」に登場する世界の法律家の面々もほとんどその存在を知らないのではないかと思う。

平和憲法はかなりの難題だ。なぜかと言えば、日本国憲法自体はリベラルといってよいものだが、その中の9条はリベラルを越えてラジカルだからだ。

このラジカルな9条をどう扱うか、それをめぐって今年2019年は、今まで以上に大きな節目の年になると言われている。この9条の問題は「9条は『近代国家』への挑戦状」にも書いたが、われわれに思考の飛躍を求めている。今までの社会科学の枠組みを越えない限り、9条擁護の論陣を張ることはかなり難しい。だからこそこのペーパーの第13チャプターは「新しい道具」というタイトルでNEW GRAND THEORYについて論じている。改憲論議の山場を迎えているからこそ、たまたま日本に留学している留学生には、やはりこの問題を紹介し、少しだけでも一緒に考えてもらうことは意味あることだろう。

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所
〒259-1293 平塚市土屋 29-46
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス
Tel: 0463-59-4111 (内線 2200)

オバマ演説が私達に突き付けるもの

What Obama's Hiroshima Speech Posed to Us
(English version of this essay is available at IBBM)

石積 勝 (M. Ishizumi)

5月27日オバマ大統領は広島を訪問しスピーチを行った。このスピーチについては様々な評価があるが、わたしは、なかなか格調の高いスピーチであったという感想を持った。官僚の作文を讀んでいるわけではないことははっきりと伝わってきた。スピーチを生中継していた米国 CNN のコメンテーターは「哲学的な」とさえいつていたが、私もそう感じた。ただ大きな限界も露呈している。最後まで情緒的なスピーチで終始しているのである。それぞれ歴史的なスピーチ一歩手前で足踏みしているのである。このことの原因を少し考えよう。

私が格調高いと感じ、CNN のコメンテーターが哲学的とさえ言う部分は、以下の様なフレーズである。

- 「原子の分裂につながる科学の革命は、道徳的な革命も求めている。」(The scientific revolution that led to the splitting of an atom requires a moral revolution as well.)
- 「われわれは戦争そのものについての考えを改めなければならない。・・・破壊する能力によってではなく、築くものによってわれわれの国家を定義するために。」(We must change our mindset about war itself ...to define our nations not by our capacity to destroy but by what we build.)
- 「すべての人のかけがえのない価値、すべての人の命が貴重であるという主張、われわれは人類というひとつの家族の仲間であるという根源的に必要な考え。われわれはこれら全てを伝えなければならない。」(The irreducible worth of every person, the insistence that every life is precious, the radical and necessary notion that we are part of a single human family: that is the story that we all must tell.)

- 「普通の人々はこれを理解すると私は思う。彼らは、戦争はこりごりだと考えている。」(Ordinary people understand this. I think. They do not want more war)
- 「広島と長崎は核戦争の夜明けとしてではなく、道徳的な目覚めの始まりとして知られるだろう。」(Hiroshima and Nagasaki are known not as the dawn of atomic warfare, but as the start of our own moral awakening.) ——日本語訳は『東京新聞』版——

しかし最後のフレーズにある「道徳的な目覚め」からすでに71年がたったが「道徳的な革命」はいまだに起こっていない。普通の人々は根源的な考え方や国家の行動原理の変化を求めているかもしれないが、実際のところ「国家の定義」・「行動様式」は全く変わっていない。こうした現実を私たちはよく知っているから、オバマのスピーチに「理想と現実との乖離」を感じるのである。CNN のコメンテーターのもう一人は、哲学的というよりは「宗教的」であるとさえ言っていたが、現実的な実行力が問われる政治指導者としてはかなり危ういスピーチであったということである。評論家としてのスピーチと紙一重のところだったのである。

スピーチ原稿に何回も自分で手を入れたらしいオバマはその最中、高揚していたと想像できる。その時、心のどこかで「米建国の父たち——フェデラリストたち」や、リンカーン、マルチン・ルーサー・キング等の哲学的政治指導者のことが頭に浮かんだかもしれない。確かに広島スピーチのトーンはそれに通じるものがあるのだが、残念ながらやはり羊頭狗肉の感じが残る。なぜか？

上記の真正正銘の哲学的政治指導者たちは、それぞれに彼らの歴史的演説や文書(例えば『Federalist Papers』)を内容的に支える「新しい政治理論」を背負っているのだが、オバマには、あるいはオバマが代表するアメリカ、もっといえばわれわれが身を置くこの現代社会には、その「新しい政治理論」が、いまだに準備されていないからである。スピーチがやはり「願望」に終わっているゆえである。「道徳革命」や「国家の再定義」、特に「国家と暴力の関係」、「社会統治と暴力装置の関係」の再定義、それを支える政治理論、あるいは「社会科学グランドセオリー」なしには、やはり、もっぱら道徳に訴える「願望」としての情緒的なスピーチにならざるを得ないのである。

それにしても彼が自覚していたかどうかは別にして、オバマはじつは極めて大きな、そして待ったなしの問題提起をしていることは事実である。彼は現在の(ということでは西洋近代の)政治理論、社会理論の克服を広島島の地で訴えたのである。最大最強の暴力装置を保持する米国の現実政治のリーダー、即ち西洋近代社会の成立と運営のトップランナーであり続けた米国のリーダーが、自らを支え続けてきた社会理論の基本

の基本、即ちく政治＝国家＝権力＝物理的強制力・暴力(M・ウエーバー) > という定式の克服、あるいは否定を、提起しているのである。

オバマのスピーチは確かに情緒的、直感的、格好つけではあるが、しかし、その問題提起は人類史における壮大なブレイクスルー、社会科学認識枠組み、社会科学グランドセオリーのパラダイムシフトを真摯に希求したものであったのである。ここから先は知識人といわれる者たちの洞察力と理論構築力こそが真正面から問われることになる。

「私が生きているうちに、この目標(核兵器なき世界)は達成できないかもしれないが、たゆまぬ努力が大変事の可能性を小さくする。」(We may not realize this goal in my lifetime, but persistent effort can roll back the possibility of catastrophe.) などという、オバマのニルイ(緩い)発言を簡単にスルーしている場合ではないのである。私たちはオバマの広島スピーチのその先を、今すぐに切り拓かなければならないのだろう。「暴力の連鎖」の世界の現実を、それを私たちに突き付けている。

(所員/いしづみ・まさる)

What Obama's Hiroshima Speech Posed to Us

By Masaru Ishizumi

for IIBM Kanagawa Univ.

On May 27th, 2016, President Obama paid an epoch-making visit to Hiroshima and delivered a speech which provoked various reactions, including some negative ones. However, I want to give high marks for his speech. His speech was convincing as he obviously was not merely reading a text prepared by bureaucrats; his own spirit became apparent in the speech. One of the CNN commentators praised the speech by describing it as "philosophical." I can agree with that adjective. But at the same time, we have to admit that the speech was one step short of a historic speech. It did not make any headway beyond the emotional. Let's consider the reasons why.

First, let me pick up below some of the phrases which I believe were "high-tone" and perhaps the CNN commentator believed were "philosophical."

- (The scientific revolution that led to the splitting of an atom requires a moral revolution as well.)
- (We must change our mindset about war itself ...to define our nations not by our capacity to destroy but by what we build.)
- (The irreducible worth of every person, the insistence that every life is precious, the radical and necessary notion that we are part of a single human family: that is the story that we all must tell.)
- (Ordinary people understand this. I think. They do not want more war.)
- (Hiroshima and Nagasaki are known not as the dawn of atomic warfare, but as the start of our own moral awakening.)

Seventy-one years have already passed, however, since the start of our "*moral awakening*." Of course, the moral revolution has not yet happened. Although ordinary people might agree with Obama about the necessity of seeking a fundamental change of the concept or definition of the nation, still they are at the same time aware of the fact that the definition and the behavioral patterns of nations have remained the same as before.

Against this background, we unavoidably feel the gap between Obama's ideals expressed

in his speech and the reality we are in. In fact, another CNN commentator said that the speech was religious rather than philosophical, one spoken by a political leader who should be judged by his ability to execute one's vision in a real political context. I would say that Obama's speech stood razor thin between the politicians and the critics. Of course, critics are not primarily responsible for the execution of ideals. Politicians are.

Obama, who is said to have made corrections several times in the draft, might have gone through a spiritual uplifting during that process. In fact, he might have had in his mind the names of philosophical or political figures such as America's "Founding Fathers," Lincoln, or Martin Luther King Jr.. Indeed, I can admit to having found some commonality between these American historical figures and Obama, as far as the tone of the speech is concerned. Unfortunately, however, I cannot help but have an underwhelming feeling regarding the Obama speech. Why so?

The political leaders already mentioned carried with them new and very powerful political theories to back up their philosophical and spirit-filled speeches. Obama, on the other hand, was (and is) not equipped with these kinds of theories. In fact, none of us are equipped with any political theory which could be the precondition for "moral revolution" and "redefinition of the nation." In other words, the speech was doomed to be a merely emotional speech, as Obama and we lack a political or grand theory which would enable us to redefine the nation and the relationship between the nation and violence, or to redefine the relationship between social governance and violence. That is the reason why the speech remains as wishful thinking.

In spite of the Obama speech's shortcomings, and whether or not he was aware of it, he certainly provoked a fundamental and extremely important issue. He implicitly said in Hiroshima that we have to overcome the current political and social theory prevailing in our modern time. It is highly significant that the leader who controls the dominant physical enforcement power vested in the most powerful nation today on earth is actually making us confront the challenges of overcoming the current social theory. In other words, Obama's speech logically leads us to overcoming the still unchallenged cognitive framework and grand theory of Max Weber's discourse, which is, politics = nation = power = physical enforcement power.

Obama's speech was emotional, intuitive, and probably pretentious. However, he has shown a serious quest for a paradigm shift in the cognitive framework of our "social

science" and "grand social theories." His speech is creating pressure on the so-called "intellectuals" whose tasks are, in fact, theory-building based on the sharpest and most creative insights of our time.

In any case, we should not allow the following loose statement of Obama to be accepted easily : "We may not realize this goal (a world without nuclear weapons) in my lifetime, but persistent effort can roll back the possibility of catastrophe." We have no time to sit and be satisfied with Obama's Hiroshima speech. We have to immediately and strenuously open new avenues beyond the speech. The reality of the world filled with the "chain of violence" is pressing us to do so. At this point on, the so-called intellectuals' contribution and imagination in making a breakthrough are seriously called upon.

July 1, 2016

12-2 Jeffrey's TATOO—Stars & Stripes: Article 9 of Japanese constitution

ジェフリー君の<星条旗TATOO—刺青>

今年もカンサス大生が平塚キャンパスで約5週間学び、神大生に刺激を提供してくれた。僕も2回ほど英語での日本論を担当したのだが、逆に、僕の担当クラス「国際政治学Ⅰ」にゲスト出演もしてもらった。たまたまその週はアメリカの60、70年代のベトナム反戦・黒人解放闘争・カウンターカルチャー・ケネディ暗殺などを扱ったビデオ映像を視る予定であったので、それを30分ほど一緒に視てもらい、その後日本人学生との討論となった。喜び勇んで出演してくれた5人のカンサス大生が160名の日本人学生を前に、われ先にとばかりに発言してくれたのは予想通りだった。30分の映像ではデモ行進のシーンが溢れていたからだろう。日本人学生が質問する。「カンサスの皆さんの中でデモに参加したことのある人は？」5名中3名の学生が手を挙げる。これには僕もちょっとビックリ。これに対して日本人学生は160人中1人。

Jeffrey's TATOO—Stars & Stripes

This year again, students from the Univ. of Kansas stayed at Hiratsuka campus of Kanagawa University for the five weeks Summer Program and offered incitement to the Japanese students. I conducted two sessions on Japan to the Kansas students in English. In return, they appeared as guests to my class "International Politics". That week in June, we were to watch the documentary video showing America's 60's, and 70's, including Viet Nam War, Black liberation struggle, counterculture movements and Kennedy assassination. After seeing the video together, discussion session started among Japanese and American students. As expected, five Kansas students who appeared in high spirits scrambled to speak in front of 160 Japanese. Perhaps because that 30-minutes video was filled with the scenes of demonstration parades, a Japanese student asked a question. "How many of you here have ever participated in any kind of demonstrations?" To our surprise, three Kansas students out of five raised their hands. In return, a Kansas student asked the same question to Japanese students..Only one hand was raised out of 160..

5人の中の一人ジェフリー君は、「同性愛者の権利擁護」のためのデモ、「イラク反戦」、「貧困学生のための学生寮建設」を求めるデモ、などに参加したと公言していた。議論でも一番積極的で、クラスで議論するチャンスがあれば是非また参加したいと言う。

彼の順番は翌々週にまた訪れる。何かのきっかけで、「愛国心」について大議論になった次の週、その議論を引き続きやることになった。そこに件のジェフリー君、他の日本人学生数名と共に再登場である。議論は<Nationalism>と<Patriotism>、<愛国心>と<愛郷心>の微妙な違い、さらには<共同体>と<個人>、<公>と<私>というような、なかなかいい線で自然に進み、僕も大満足だったのだが、なんといってもやはり主役はジェフリー君になった。ジェフリーの雄弁のことではない。彼のTATOO <イレズミー刺青>である。

リベラルあるいは反主流系のデモに何回も参加しているジェフリー君だから、当然彼は「愛国心」とは最も遠いところにいる男だろう、もっ

Jeffrey who was one of five students, said openly that he participated in the demonstration for the "protection of the rights of homosexuals", "Iraq war", "dormitory construction for poor students". He even said that he would like to join to this class again if invited.

His visit was realized two weeks after. Together with three senior Japanese guest students, Jeffrey appeared again. Discussions were centered around issues such as the subtle differences between <Nationalism> and <Patriotism>, relationships between <Community> and <Individuals>, and further more between <public> and <myself>. I was truly impressed with those discussion among students. But the protagonist was definitely Jeffrey. --- Not his eloquence but his tattoo.

As Jeffrey joined the demonstrations along the lines of liberal or dissident few times, we assumed he is a man in the most distant from "patriotism" or "nationalism". We assumed he even rejects those notions. But our assumption was completely betrayed. He rolled up his T-shirt in front of everyone. Therein is the tattoo—IREZUMI-- Stars and Stripes perfectly painted in red, white and blue, carved at the top of his thick right arm ---but about 20 insufficient number of stars. No matter how much thick arms he has, 50 stars

たとえば「愛国心」に拒否反応を示す男だろうと思っていた僕は完全に裏切られることになる。彼は皆の前でシャツをまくりあげた。そこには赤・白・青でバッチリ描かれたく星条旗のイレズミである。太々とした右腕上部に彫り込まれた——でも星の数が20個ほど足りない。いくら太腕でも50個はなかなか彫れないらしい——<スターズ・アンド・ストライプス>を誇らしげに掲げながら彼は言う。「自分は愛国主義者だからこそデモに行く」と。

「日本の左翼も、<日の丸のイレズミ>して反戦デモに行けよ」と誰かが言う。「だから日本ではく愛国心>が右側の人たちにハイジャックされているのが問題なんだよ」とまた別の学生が言う。学生たちの「愛国心」をめぐる議論は一部日本人学生の間でいまでもつづく。

ところで彼のあのイレズミは本物だったのか、それとも2-3週間でとれちゃうフェイクのやつだったのか？聞くのを忘れてしまった。僕は、一生モノの本物と見た。

could not be carved. Proudly showing his Stars & Stripes, he says “Because I am a nationalist, I go to the demonstration” .

“Left wing of Japan also should go to the anti-war demonstrations with the Irezumi(Tattoo) of the Rising Sun” One of the seminar students argues. “What is really unfortunate is that the nationalism has been hijacked by right wing people in Japan” Another students says. Debate over the “patriotism” still continues among the Japanese students.

By the way, I forgot to ask whether or not Jeffrey’s Tattoo was the real one or darn fake which lasts for only 2-3 weeks. I pledge that was genuine real tattoo staying on his right arm for good.

このエッセイは国際経営研究所発行の国経研だよりNo.14に掲載されたエッセイ（一部省略）に英訳を今回付けたものだ。

9条自体の問題以上に筆者としては日本の学生にく若者の政治的な無関心>について考えて欲しいと思う。じつはこれだけの無関心は世界の不思議なのだということを解かってほしかったのだ。

もちろんジェフリー君の登場は、そして再登場は筆者が特別に仕組んだことではない。半ば偶然の産物だ。留学生に限らず、クラスにゲストが時々参加することは刺激になる。もっともっとそうしたクラス運営ができるようになることが望まれる。30年以上前に、別のエッセイで（「世界の中の日本に明日を」というタイトルだったと思うが）日本の教育に決定的に欠けているのがスポンテニユイティー（spontaneity）だと書いたが、まだまだこれが足りない。正解を覚えるのが勉強だと長年教え込まれてきた日本の学生にとって、これが一番苦手だ。最近ようやくそのことが意識されてきたのではないだろうか。

12-3 9条は『近代国家』への挑戦状

Article 9 of the Japanese Constitution is a challenge to the “Modern Nation State”

以下は2006年6月パリでの講演で9条問題を論じた後、ある会報誌（9条連だより）に掲載した筆者の文章に加筆訂正、対応英訳を2018年に付け加えたもの。掲載時のエッセイタイトルは「9条は『近代国家』への挑戦状」

<9条を国際会議で取り上げさせるのは、なかなか難しい>

It is quite hard to feature Article 9 at International Conferences.

パリに一週間滞在して、第16回国際民法法律家会議に参加した。進歩派、社会派法曹人が4年に一回、世界中から集まって民主主義と平和の問題をじっくり議論する会議だという。今年の参加者は400名。六つの分科会に分かれた。分科会は①国連憲章、国際機関と国際関係②テロリズム、人権、抵抗権③法律専門職と司法の独立④グローバルゼーション⑤情報の権利、情報の公開、

ジャーナリストの保護⑥環境。僕はこの中の第一分科会に参加したが、時々抜け出して第二分科会あたりにも行って発言すべきだったかなと思う。

I stayed in Paris for one week and participated in the 16th World Congress of Democratic lawyers. The conference takes place once every four years, and progressive legal professionals from around the world gathered together to discuss issues of democracy and peace. The number of participants this year was four hundred. The conference had six subcommittees. The subcommittees were: (1) Charter of the United Nations, International Organizations and International Relations (2) Terrorism, Human Rights, Rights of Resistance (3) Independence of the Legal Profession and the Judiciary (4) Globalization (5) Protection of Information Rights, Publishing, and Journalists (6) Environment Issues. I participated in the first subcommittee, but felt that the second committee was more appropriate for me.

第一分科会では国連改革の話しがどんどん時間を侵食し、僕を含め日本からの参加者が準備万端で臨もうとしていた「9条問題」に割り当てられた時間が極端に短くなったからだ。

しかし、とにもかくにも第一分科会には、日本からの参加者がいちばん集まっていた。「9条は日本のローカルな問題ではないのだ」「ここにいるリベラルを自称する法律家一人ひとりの問題なのだ」とだけは、繰り返し、繰り返し、短い時間の中で叫んではきた。叫んではきたが、どの程度僕の真意が伝わったか、おおいに疑問ではある。

In the first committee, much of the time was spent on a session regarding UN reform. The time for the presentation and discussion of Article 9 of the Japanese Constitution was considerably shortened by the chairperson. During the limited time, I repeatedly made the appeal that the issue of Article 9 of the Japanese Constitution is not just a local Japanese issue, but

rather is an issue for every self-proclaimed liberal lawyer attending the conference. To what extent was I successful in making them believe so? I have to admit that I have my doubts.

< 3分で9条を衝撃的に論じる方法 >

The way we could discuss Article 9 in a dramatic manner in three minutes.

やや欲求不満気味だったからだろう。帰りの飛行機の中でも「3分で9条問題を世界の人々に衝撃的に論じる方法」を何回も何回も考えていた。自分の中だけで考えていてもグルグル回るだけなので、時々、同行の「つねさん」こと常石敬一氏（9条連共同代表）に僕の知的格闘技のスパーリングの相手になってもらった。帰国してからも、じつは考え続けている。その中で、僕自身の「9条論」は一度剥けてきたようだ。

Because of the bitterness and frustration experienced at the conference, I was thinking over and over on the plane back to Japan of more effective and shocking ways to discuss Article 9 in a few minutes at the international conference.

世界のリベラルを自称する、平和の問題に真剣に、実践的に取り組んでいる知性豊かな人々に対して、なぜ「9条」を自分の問題として受け止めさせられないのか？このことを真正面から見据えないと、とてもじゃないが「9条—世界へ、未来へ」とならないのだが、これについて、少しだけ切り口が見えてきた気がする。これは僕にとっては、おおきな収穫だ。

Why was I not successful in making the non-Japanese liberals who are deeply involved in issues of peace realize that the Article 9 issue is their issue? Little by little, I think I am making headway.

じっさい、帰国して四日目の昨日、それぞれ20人ほどの普通（？）の学生

相手に（一組はアメリカ人に英語で、もう一組は日本人に）まさしく、今、僕が考えている『9条問題』を一時間ほど話したのだが、今までとはちょっと違う、「手ごたえあり」の反応だったのだから、これは、おおきな収穫だ。

In fact, a few weeks ago, I dealt with the issue in front of Japanese and American students for about one hour. My talk reflected my recent thinking triggered by the Paris conference. I think I had more positive reactions from the students than before. I believe I got a lot out of attending the meeting in Paris.

<日本は「国家」じゃない>

Japan is not a Nation ???.

「皆さんは日本が国家だと思っているだろうけれど、じつは日本は国家じゃありません」「少なくとも9条は国家を否定しています。それを皆さんは<希望>と考えるのか、<無謀>と考えるのか？」パリの会議では、そう切り出さなければならなかったのだ。世界第二位の経済大国が国家じゃないといわれても「ナンノコッチャこれは」ということになる。ここから話しは始まる。

I should have started my three-minute presentation at the Paris conference with this dramatic statement: “I guess you think Japan is a nation. But it actually is not. Article 9 of the Japanese Constitution denies the notion of a nation. The issue is whether you think of it as <hopeful> or as<baseless>.” The audience might react, “Are you saying that the world’s number two economy isn’t a nation?” From there the discussion begins.

国家というのは近代国家のことで、その近代国家は全て軍隊をビシッと持っていて、その軍隊が20世紀だけで7000万人の命を奪い、もう「こりごり」という気分の中で9条が登場した。つまり9条は近代国家への情緒的アンチ・テーゼなのだが、さて21世紀の今、その近代国家の賞味期限はどうなっているの

か？最強の近代国家アメリカが、その近代国家の要の「軍隊」でイラクを平定できない。逆にその「軍事力」が暴力連鎖の世界を作り出している。この状況をどう考えるのか？国連がどうこうという問題でもない。ウンヌン、ウンヌンと話しは続く。

When we speak of "nations," we are speaking of modern nation states. Of course, modern nation states are the ultimate and sole possessors of military force. Military forces have taken 70 million lives in the 20th century alone. Article 9 was born in the midst of the feeling of "we have had enough." Article 9 is in fact an "emotional antithesis to the modern state." Now, what is the "sustainable duration" of nation states? What do you think of the fact that armies of the strongest modern states are not able to pacify Iraq? Instead, military forces are apparently by and large aggravating the situation of the "chain of violence." The discourse goes on like this.

日本では「普通の国になろうよ」（つまりもう一度、ちゃんと一人前の近代国家になろうよ）という議論が日々勢いを増しているけど、世界の知性の代表者の皆さん、本当にそれでいいですか？あなたと近代国家の関係は今どうなっていますか？まあ、こういった流れで話をしなければならなかったのだろう。

In Japan, discussions arguing for Japan to become a "normal state" ("Let's become a full-fledged nation as soon as possible.") occur day by day. The question to be posed next is as follows: Are you really OK with the situation of the world today? How do you assess the state of the modern nation-state today? This should have been the flow of the discussion which I led.

< 9条二項は21世紀の文化大革命・・・そして僕らは？ >

Article 9 paragraph (2) the cultural revolution of the 21st century... and what do we do about it?

「9条問題の核心は、第一項ではなくて第二項なのだ」とは、9条連代表の伊藤先生の従来からの主張で、僕もまったくそうだと思う。僕の言い方だと、第一項はリベラルで、第二項はラジカルということになる。そして第二項は近代国家に挑戦状を突きつけている。

Prof. Ito argues “the crux of the problem of Article 9 is not paragraph (1) but paragraph (2).” I fully agree with him. In my view, paragraph (1) is liberal and paragraph (2) is radical. Paragraph (2) of Article 9 is a challenge at gunpoint to the modern state.

パリに集まった世界の進歩派法曹人には第一項はなんの抵抗感もなく受け入れられる。国連憲章とも一致している。しかし第二項は彼らに（そして実は僕らにも）思考の飛躍を求めている。国連の先に行っている。リベラルの先を走っている。思考の飛躍は法律家にはもっともきついエリアだ。だから、パリに集まったりリベラル法律家たちの大多数は、本当のところ、第二項については理解も納得もしていないし、したがって心底から、自分自身の決断として、支持しているわけでもない。そう思ったほうがよい。

Liberal lawyers around the world who gathered in Paris can actually accept and agree with paragraph (1). Paragraph (1) is also in line with the Charter of the United Nations. Paragraph (2) involves a leap in thought. It goes beyond the UN Charter. Leaps in thought are things that lawyers are not good at. It is therefore understandable that the lawyers in Paris did not understand and were not convinced of paragraph (2). It is extremely difficult for liberal lawyers to fully support as their own determination. I am not at all optimistic with regard to lawyers' sympathy and understanding of paragraph (2) of Article 9.

第二項を持つ僕たちは、そうとは知らず、じつは世界史の最先端を歩いているのだが、その第二項を保持し続けるということは、本当のところ、21世

紀の文化大革命（???）の先頭に立つ決意を、改めて、はっきりと持つということでもある。

Without knowing it, we (Japanese) are walking at the forefront of history by having paragraph (2) . For us to keep paragraph (2) means once again to resolve walking on the front line of the cultural revolution of the twenty-first century.

さて、その自覚と気概が、この日本列島といわれるところに住む僕たちに、あるのかどうか？

But now, do the people living in this archipelago called Japan have the consciousness and spirit to maintain and support it? That is the question.

上記と似た内容の最近のプレゼンとして、以下のハバナ・キューバでのプレゼンがある。

12-4 "Japan's Peace Constitution in crisis" speech by M.Ishizumi at the "4th International conference For World Balance", 28 Jan 2019 at Habana, Cuba

Summary of the presentation:

Abstract:

The article 9 of Japanese Constitution is a most amazing statement as it prohibits the possession of any kind of military force under any circumstances. While this article has been labeled as "idealistic" or "unrealistic" since its inception in 1947, it now offers us a fresh, new meaning in light of the post 9/11 global development, i.e. chain of violence.

Article 9, which is the legacy of the our 20th century, stands not only as a heartfelt desire of the people of the world for "non-military world" but also

as a very real policy choice now, truly providing us with hope in a world hopelessly caught up in the chain of violence. The time and conditions are ripe today for us to consider Article 9 as a potential breakthrough.

About 80% of the Parliamentarians are in favor of the change of the Constitution. More than 50% of the general public consistently show their support for the current Constitution.

As I believe that the Article 9 issue is not a domestic issue but a world issue, I would like to ask participants to be engaged in open discussion on the matter. I hope we come up to take some concrete measures in support of this very precious world treasure of our time.

Chapter 13 新しい道具 NEW GRAND THEORY

このチャプター 13 はもっぱら筆者の問題提起だ。実証的アプローチをとりあえず無視して、筆者が今後取り組みたいと考えている Normative なテーマについての話だ。あくまでも問題提起だから、ここに記載されていることをそのまま受け入れる、あるいはこれを学びの姿勢で憶える、というようなことはまったくナンセンスだ。興味ない学生にはほとんど時間の無駄かもしれないが、とにかく筆者がここのところなにを考えてきたかについて、そのもっとも大きなテーマを紹介することにする。

13-1 総合研究大学プロジェクト「戦争と平和」

筆者は2005年から3年間にわたり総合研究大学院大学（葉山）国際プロジェクト「戦争と平和」に参加した。プロジェクトは9・11以降の状況を反映し、大胆かつ根源的な新たな平和構築理論の検討がその目的だった。そこでの筆者の報告の抜粋を以下に記す。報告のタイトルは「我々はオルタナティブを構想できるのか？」“Can we present an alternative ?” だ。

Chart 57

Can we present an alternative?

**For the construction of an
alternative to the dead-end
paradigm of “Peace and War”**

Masaru Ishizumi,
Professor, International Politics,
Kanagawa Univ. Japan

Chart 58

- *The term “ paradigm “has been over- used for the last 40-50years. But today is the day that we should most seriously consider the use of that terminology in our fresh efforts to open a new avenue for our normative approach to the compelling question of war and peace in the 21st century.*

上記は会議進行役の総研大学黒川氏の発言だ。これは要するにパラダイムシフト paradigm shift が必須だということだ。そのための会議だったのだが、筆者はその狙いをもう一度、最終日の報告の中で振り返っている。なおパラダイムという言葉は、べつに学問研究だけでなく、広く一般に使われるようになったのだから、辞書的にでよいから学生も調べおいた方がよい。この言葉を世界中に広めたのはハーバード大学のトーマス・クーンという科学史の教授だが、日本にその言葉を紹介したのはクーン氏の弟子、神奈川大学経営学部設立以来の経営学部教員、故中山茂さんだ。筆者も頻繁に日本の教育のあり方などについて語り合った。

Chart 59

- The following are the areas of our concern:
 - 1) biological studies of human being
 - 2) anthropological studies of human conflict
 - 3) war and peace in history
 - 4) nature of current conflict
 - 5) strategic policies of states
 - 6) weapons
 - 7) possibility of disarmament
 - 8) analysis of current international relations

生物学や人類学を含め、紛争の根源的理由を議論し、最終的には現実の国際関係における暴力連鎖の世界からの大転換のための理論を提示しようというのが、このプロジェクトの大胆な狙いであると述べている。これには、いわばこれまでの科学、特に社会科学の大転換が必要だというわけだが、それを筆者は次のようなレジユメを作りながら論じた。

Creation of New Grand Theories

- 1 Social Science paradigm today
- 2 Max Weber : politics=power=state= physical enforcement of violence--*ultima ratio* of social management
- 3 Karl Marx: History of human kind=history of violent class struggle
- 4 Why social scientist were voiceless facing 9/11 ? --Because we are all conditioned by Weber/Marx paradigm --We were not able to go beyond "Just War/Unjust War" paradigm i.e "legitimacy" centered discourse.
- 5 The new grand theory has to overcome modern Social Science---Age of Enlightenment Paradigm

そしてそれを成し遂げるためにじつは日本のは多大な貢献の可能性を持っているというのが筆者の主張である。これを次のように主張している。

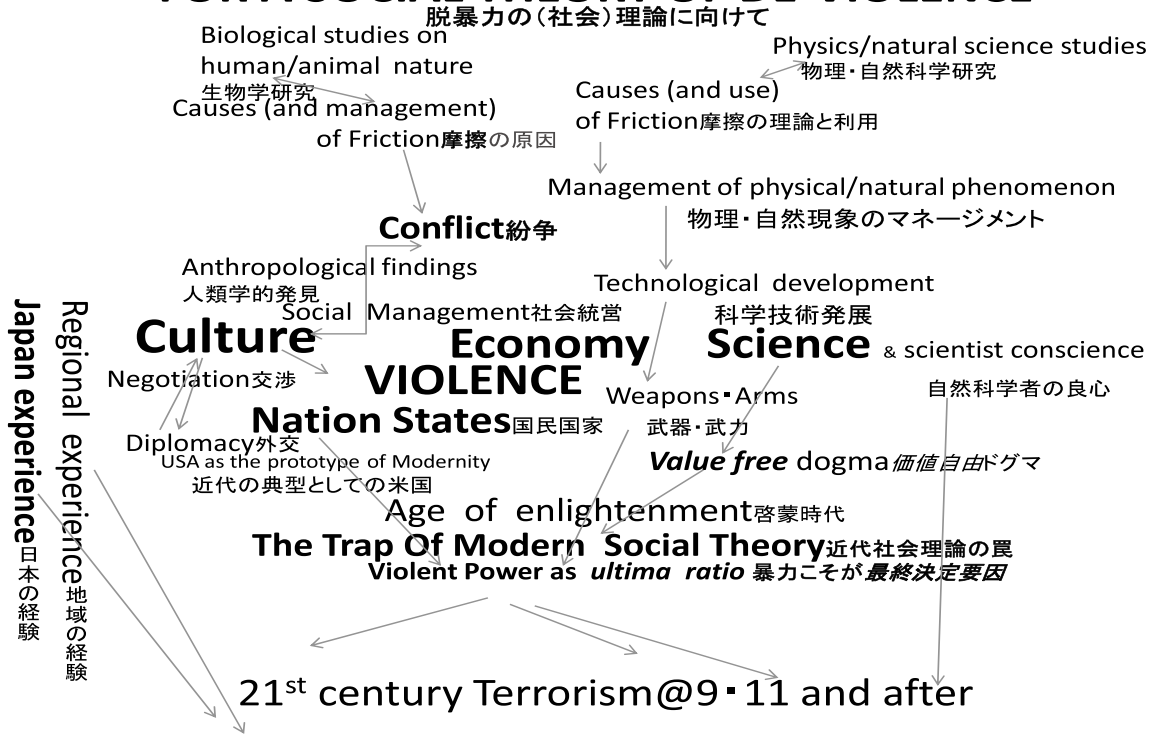
Japan's and other non-western experiences

- 1 Overcoming limitations of Modern Western Social Sciences.
- 2 Providing scientific basis for the normative Japan's Peace Constitution.
- 3 Treweek mentioning about Tokugawa Japan is important --- "giving up the gun"(Noel Perin)
- 4 Peace Constitution in tune with political culture prior to modern Japan---Meiji/Taishou/Showa history of Japan as a major deviation from Japanese political tradition.

上記3の Treweek は米国参加者のことであり、彼女がノエル・ペリンの『鉄砲を捨てた日本人』を会議で取り上げたことの重要性について筆者がのべたことについての言及だ。いずれにせよ3年間の議論を踏まえたこの時点での理論構築の覚え書きを、以下のようなチャートにとりあえず筆者はまとめた。

Chart 60

FOR A SOCIAL THEORY OF DE-VIOLENCE



このChart 60の見方は以下の通りだ

1. チャート左側は社会科学的アプローチが主に担当するものだ。右側は従来ほとんど無視されてきた自然科学からのアプローチである。
2. 問題の核心は啓蒙時代の科学、そしてその一部である近代社会科学理論の罫を自覚し、それを乗り越える社会理論を構築できるかどうかだ。
3. 社会統営 (social management) ではその最終決定要因がパワー (権力・暴力使用の権限) であると了解されてきたが、それを相対化してこそ新しい社会理論が生まれるだろう。
4. その際、欧米以外の地域の経験、特に日本の経験は貴重だ。日本は近代、あるいは近代化の<光と影>を他のだれよりも激しく経験している。広島・長崎は特にそのことを象徴している。また、このチャート作成時には当然なかった東北大震災、福島第一の経験はそのことを決定的にしたとってよい。未来を切り開く新しい道具立て開発に関して、日本は特別な責任と可能性を持つというのが筆者の主張である。

以上このChart 60の見方の1～4との関連、またchart 60全体との関連でchart 61として以下に提示するのが政治学者、故神島二郎の手になる「政治元理表」である。

この元理表については様々な場面で論じてきたが、今までに提示した元理表と今回のものとはひとつだけ違うので、そのことを述べる。

これまでと違い、今回は表の右側に行くに従って台紙の色が濃くなっている。これは元理の右側に行くしたがって、社会のまとめ方が「手あらい」ものになっていくことをわかりやすく、ボックスの背景の濃淡で示している。神島は元理表の左側に位置する帰郷・カルマを「お手やわらかな<マトメ>」と表現し、同化・自治を「手ぬるい<マトメ>」、元理表右側の支配・闘争を「手あらい<マトメ>」と表現している。次ページで示す元理表 (Chart 61) はじつは何回か改訂されているものであり、神島の手になる最後のものであるが、ここでは手洗いまとめの最右欄に<闘争>ではなく<支配>が位置付けられている。このことの意味するものがなんであるかという点について神島は論述していないが、やはり近代社会の抱えもつ「支配の原理」についての、神島

の今まで以上に厳しい見方が、ここに反映されているように思われる。

暴力を最終決定要素とする近代政治学乗り越える理論構築を目指した神島は個人としての価値判断として、暴力の相対化を可能にする政治学グランドセオリーの構築を行っていた。そこで当初<闘争>を最も激しい原理として右側に位置付けていたのだが、晩年には<闘争>ではなく、<支配>を最も激しい纏めの原理として位置づけたのだ。<支配>はより構造的な暴力を伴う、したがってより強度の、持続するハードなまとめなのだという考えでなかったかと思う。残念ながら生前、神島にこのことを直接聞くチャンスを逃してしまったが。

とにかくこのチャプター13「新しい道具」は、<西洋近代社会科学を乗り越える新しい道具立て>という意味だが、筆者はその中心に神島氏による政治元理表を位置付けている。元理表についてはすでに部分的に他の論文等でも論じているが、いまだ包括的に論じるまでに至っていない。今後の課題だが、とりあえずチャンスがあればクラスの中で、口頭でパワーポイントを使用しながら少しでも話をしたいと思う。

参考文献

- * 「近代西洋政治学の罫」(神島二郎先生追悼書刊行会)1999年

13 - 2 神島二郎「政治元理表」

Chart 61

政治元理表 table of political elements

元理 category	規範	エロス Eros	カルマ Karma	同化 Assimilation	互換 Reciprocity	自治 Autonomy	法 Rule of law	知己 Menschenkenntnis	闘争 Struggle	支配 Hegemony
権力 Power(gambit)	人心 current mood	愛 love	業 karma	文明 civilization	交換 exchange	世論 public opinion	法 law	出合い encounter as chance	真説 mana	武力 armed force
体制 Regime(order)	まつらう・しらす pietas & regno	族制 relative system	縁 pratyasamutpada	内外兼真 center & periphery	コムニタス communitas	連合参加 consociation	原告 被告 accuser & accused	一人関係 zweiseamkeit	敵味方 friend & enemy	支配従属 domination & subjugation
制度 Institution	よとし trust	家族なり教養 family-Bildung	道理 dharma	教義 doctrine	伝統 tradition	契約 contract	法治国 Rechtsstaat	たのみたのまねる confidence	治 judgment	組織の強制 organization as coercion
運動 Activity	ものあわれ Japanese boredom	反抗期 rebellious age	達観 satyagraha	造反 zao fan	革新 innovation	異議 protestation	市民オンブズマン democratic control of public administration	不信 distrust	乱 conflict	抵抗 resistance
指導 Leadership	受容 capacity(network)	和 scharif	行 yoga	超贈与 potlatch	志 ambition	代表 representation	弁論 legal debate	人間洞察 insight into personality	カリスマ charisma	統率 capability (commandership)
変動 Change	なる becoming	一家離脱 broken up family into singles	輪廻 pantha rhei	情報革新 information revolution	世直し restoration	俱分進化 dualistic evolution	政治の透明化 political transparency	祝祭 festival(orgie)	興亡 rise & fall	暴力革命 violent revolution
価値 Value	清明 serene (innocency)	幸福 happiness	平安 santi	豊かさ affluence	共生 millet (milla)	自由・平等・友 liberty/equality/fraternity	公正 fairness	信義 faith	いのち life(human rights)	正義 justice
責任 Responsibility	懺悔・自決 confession/suicide	謝罪 apology	諦観 resignation	私財極尽 public services	自戒 self-discipline	相互決定 mutual decision	成敗 judgement	慎独 self-carefulness	人民裁判 people's court	戦争裁判 war-tribunal
財源 Finance	奉納 offer to deity	共食 communion	布施 offering	貢物 tribute	異人歓待 hospitality	課税 approved taxation	自弁 pay one's own expense	提供 presentation		
基底 Base	馴化強制 convergent constraint	家族強制 family constraint	無為強制 de-imaging constraint	無刃強制 borderless constraint	無刃強制 borderless constraint	運路旅宿強制 hijra(mobility) constraint	情報公開強制 information-constraint	青春体験強制 youth experience constraint	物化強制 reificative constraint	異化強制 matsuyayva constraint